

四国八十八ヶ所弘法大師御詠歌

序

私は讃岐の片田舎に生れ、お遍路の振る冴えた鈴の音で育った。成人し教師となって、遍路にも出かけた。或冬、早朝の寒稽古で一生徒が、奔馬性肺炎に罹った。私は仏の大慈大悲にすがって、お四国参りをして見舞に行く。定命が来たのか、夢となく現となく、極楽を見つつ息を引き取った。クラスの全員が、遠い阿讃の山奥深く、野辺の送りをした。卒業の時は寺で回向して別れた。

遍路をしていると、尊い遍路に遇うこともある。白峰寺の麓で、屋台車を引き、親子三人を載せた、七才位の遍路に遇った。この遍路は、足の不自由を癒すため、備中から四国に渡り、野宿しながら十回廻った。十一回目のお礼参りの際、ぜんごん宿をとった。その家の主人が、たまたま病人だったので、仏の慈悲を戴かせようと思い、重い屋台車を引いて高知からここまで来たのである。私はこの無償の愛情に、開眼された。遍路をして思うことは、遍路には知識もいらぬ。身なりもいらぬ。ただすなおな心、まるはだかの心さえ、持てばよい。金剛杖を頼りに、仏ごころのめざめるようにと、内を省りみ、父母先祖への、報恩と回向、ついでは、子孫の繁栄を願う、永遠の鑽仰ではないでしょうか。

さて、私は五十六才で定年になって、晴耕雨読の百姓となった。ところが、七十才になって、身の衰を感じかけ、百姓をびたりと止めた。次の歌は百姓中の歌の一部です。

わが上に 鳴きつつあがる夕雲雀 黙々と一人粃種を播く

妻が稗 抜き行く後に 抜き続けり 昼の苗代 日に煌きて

雨まぜに 疾風吹くまま ひたむきに 菱子の麦の 諸伏すあした

たたなはる 山脈燃えよ 野の鳥の 鳴きて止まざる 春来にけらし

明けば暮れ 暮るれば明るく この世かな 在るがままなる 安けさに居て

供出の 米俵つむ 猫車 白菊競ふ 我門を発つ

在り在りて 生き抜き来る 吾が一生 無為にして 今天地の春

七五三 藁さしわけて 注連なへば 我が指先の こころえて伸びず

畑中に 吾れ独り居て 旦旦と 麦の間打つ こと思ふなく

ひねもすを 雑木の稍 風鳴りて 我は菱子の 麦に土かく

むすびかね 息ぎれしつ つ 米俵 いく度しなほし 俵となりぬ

緑濃く 艶めく 昼の 苗代に 稗など 抜けり 眼鏡をかけて

芋掘りに 疲れ帰れば 庭先の ジンジャの花の 匂ふ夕暮

野にあれば 卵を脛に あてて破り 食らふ間も 春の風吹く

節くれし 我が厚き掌を 見ることも ありてしばらく 野火燃えさかる

百姓を止めてから、遍路一途の旅をはじめた。吉祥天像に憑かれては、いくたびか知れず、善通寺にお

参りをする。或る時は、岩が根のこころしい山坂を、登り下りし、銀のようなさざ波の光を浴びながら、渡

舟で渡る。路傍で、お婆さんに遇うと、阿波方言で「ようお参りなはれ」と、いたわられる。道隆寺では護

摩修法に参加する。護摩木は、行者の手から焚かれ、高らかに唱える心経の声の内に、一切の煩惱は、焼き尽くされて、人は真実と和合に目覚める。三角寺では、寡婦に遇って人と人との因縁をつくづく思った。

このように、遍路をして仏に詣り、心のうちにひよいと、呼び起こされた感情を、歌の形で現わしたのが、四国八十八ヶ所み仏の歌です。私は歌人でありませんが、価値ある歌は出来ません。仏にお供えした。この歌集を、どなたか読み取って戴けたら、これほどうれしいことはありません。

終りに大師御詠歌と扁額についてつけ加えます。大師堂で、大師を拝んでいる中に、段々とめばえて出来たのが、この御詠歌です。遍路するたびに唱えます。ここで額に彫って、奉納したことについて、申します。或年、四十三番明石寺に参ったところ、老僧が言われるには、「この寺には、徳川の世に、漁夫の奉納した額があり、今にその子孫が、参詣する」と。この言葉を聞いて、ふと思いついたのが、御詠歌を額として彫刻することでした。彫刻の経験はありませんが、一本の彫刻刀で、彫りつづけました。一念は強いもので、四年で奉納し終りました。刀に力が入ったとみえて、餅をあてたような、力瘤が出来ていました。

第一番 靈山寺

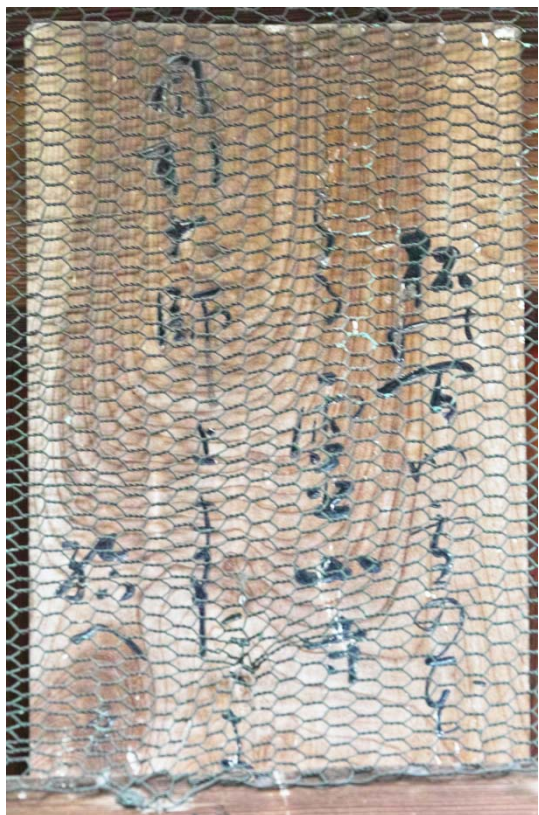
松の間ゆ 雪の花散る 靈山寺 目引大師よ またたき給へ

松の間ゆ・松の間から。

雪の花・正月元日に雪が降ったので

雪を花にたとえた。

目引大師・めびきたいし。大師が目をぱちぱちすると御利益がある、と伝える。



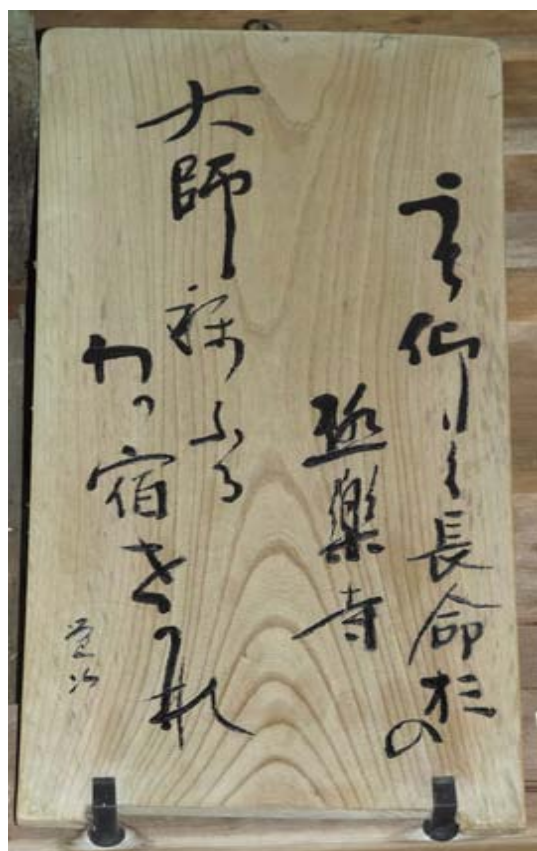
第二番 極楽寺

打仰ぐ長命杉の極楽寺 大師称ふる我が宿世かな

長命杉・大師御手植の杉と伝える。

称ふる・たたふる。ほめる。

宿世・すくせ。前世からの因縁。



第三番 金泉寺

照る月の 映る井のある 金泉寺 大師のみ影 さやに見てしか

金泉寺・大師泉をほられ、こがねの霊水が
湧くのを見給いて寺号とすると伝える。今
に井が残る。

み影・みかげ。み姿。

さやに・さやかに。はつきりと。

見てしが・見たいものだなあ。



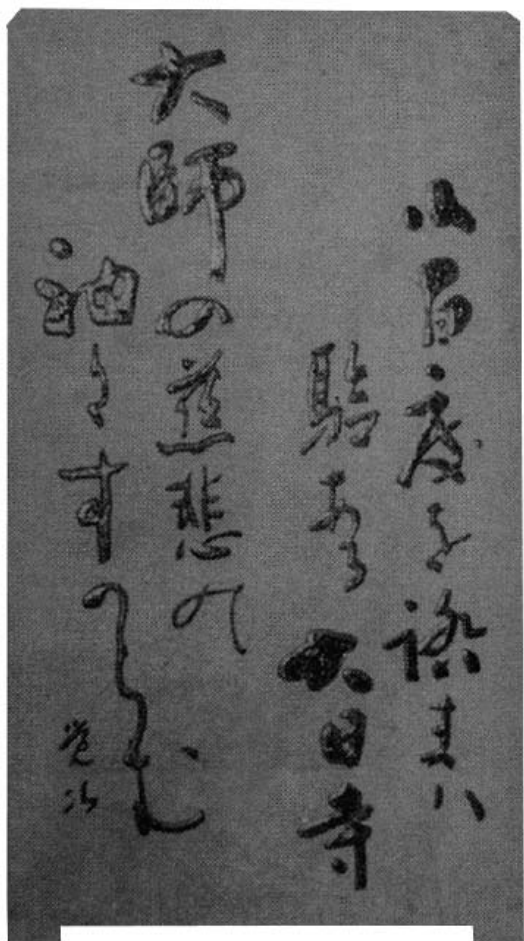
第四番 大日寺

お百度を 踏まば験ある 大日寺 大師の慈悲の 袖にすがらむ

お百度・お百度まいりの略。この寺のお百度石は、字も石も風雅である。

験・けん。仏道の修行をつんだしるし。

すがらむ・おすがりしよう。



第五番 地藏寺

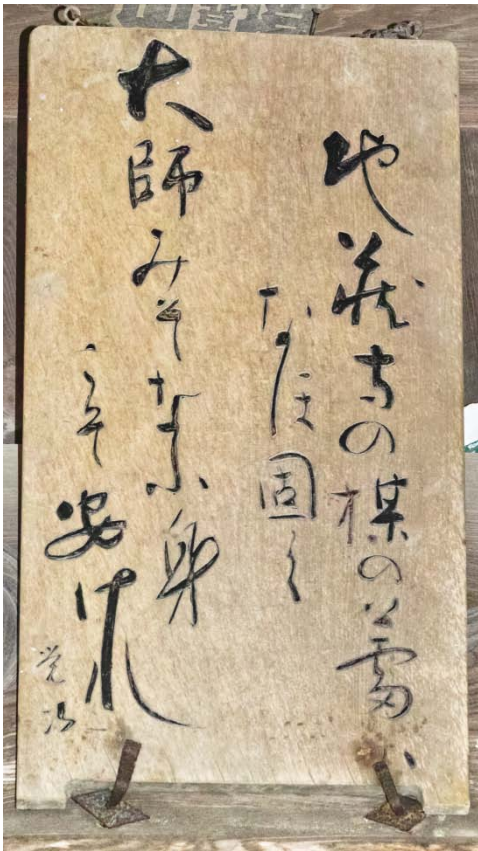
地藏寺の 楳の蕾は なお固く 大師みそなふ 身こそ安けれ

楳・うめ。梅の古字。

みそなふ・御覧になる。御守りくださる。

固く・蕾の固いのと、御守りくださる「こと」の
固いのを掛けたことば。

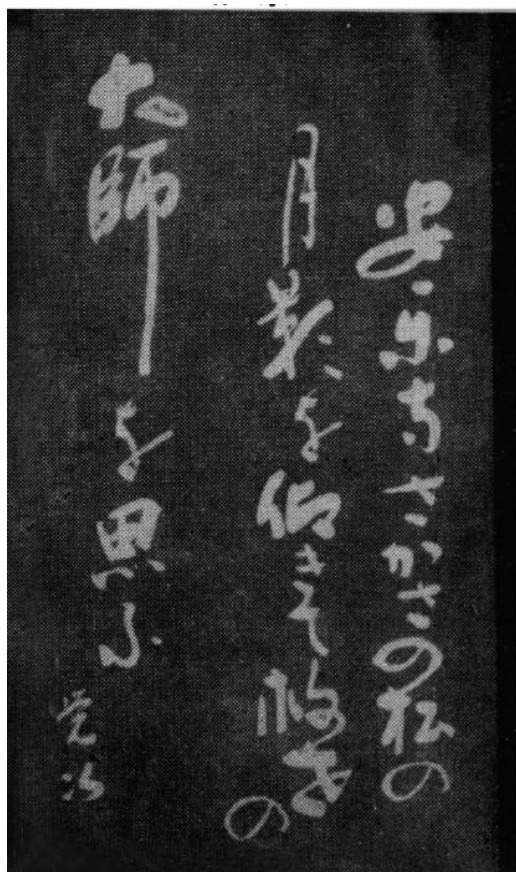
身こそ安けれ・身は安全である。



第六番 安楽寺

安楽寺 さかさの松の 月影を あふぎて救世の 大師を思ふ

さかさの松・大師がさかさにお手植になつた松が庭にある。蘆の湖にさかさの杉があるが、それから考えると、大師がこの寺で井を掘られて、水がこんこんと流れ出て、その水に松がさかさに写つたので、この伝説が出来たとも思われる。

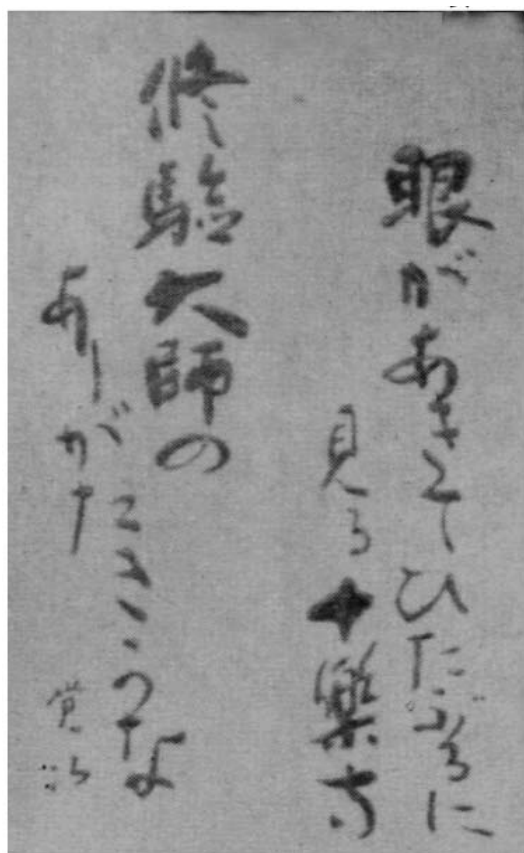


第七番 十楽寺

眼があきて ひたぶるに見る 十楽寺 修験大師のありがたき
かな

眼があく・寺伝にめくらの遍路が開眼し
たと松葉杖を奉納している。
ひたぶるに見る・ただもうひたすら見て
いる。

修験大師・山中で難行苦行して、仏道を
修行する大師。



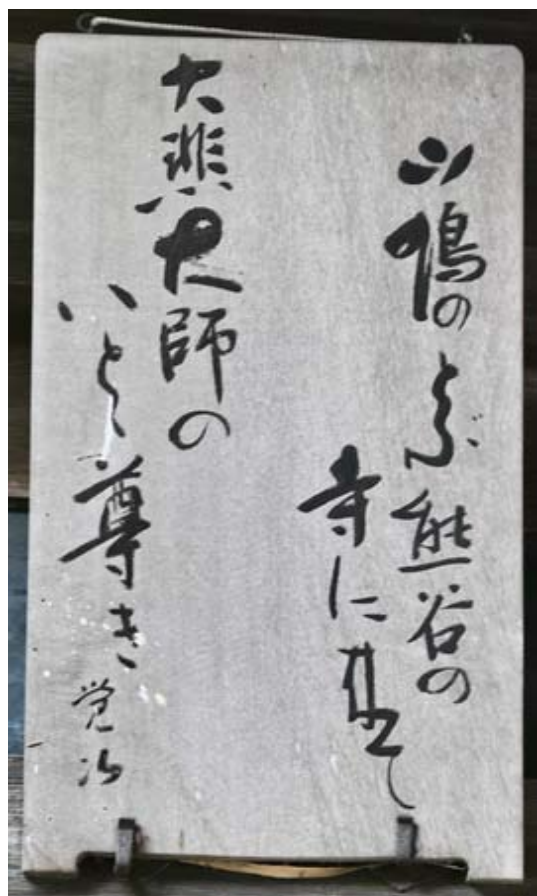
第八番 熊谷寺

山鳩の 飛ぶ熊谷の 寺に来て 大悲大師の いとど尊き

山鳩・大師堂の石階にすみれが咲き、
山鳩が遊んでいた。

大悲・だいひ。ひろくかぎりないいつく
しみ。

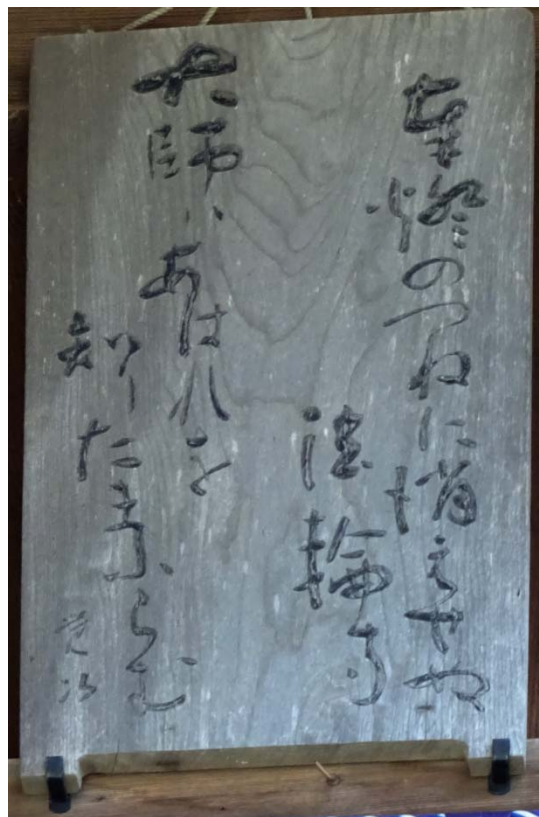
いどど・ますますいよいよ。



第九番 法輪寺

奉燈の 常に消えせぬ 法輪寺 大師あはれを しり給ふらむ

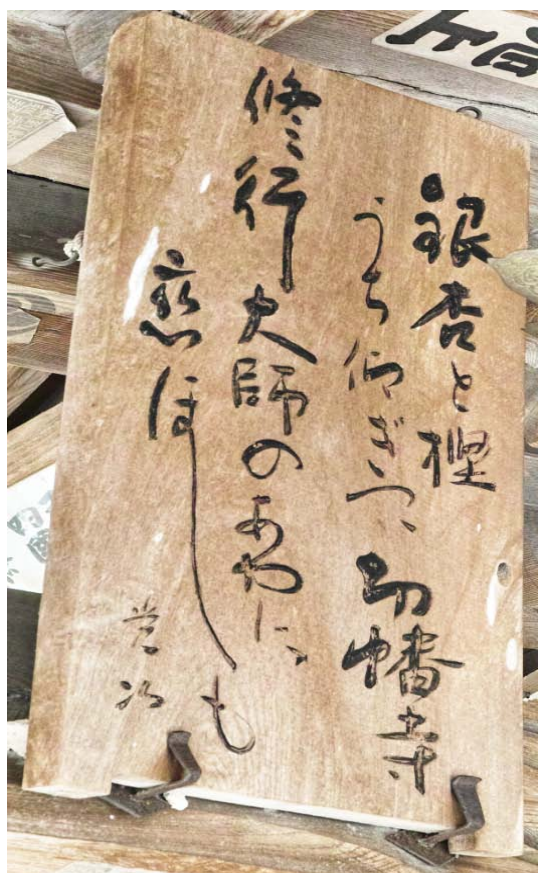
奉燈・ほうとう仏に奉るともしび。田圃の中
の寂しい寺に、いつも奉燈がかがやく。



第十番 切幡寺

銀杏と檜 うち仰ぎつつ 切幡寺 修行大師の あやに恋ほしも

銀杏と檜・大師堂の側にある。
あやに・むしように。
恋ほし・恋いしい。したわしい。
も・感動の助詞。なあ。

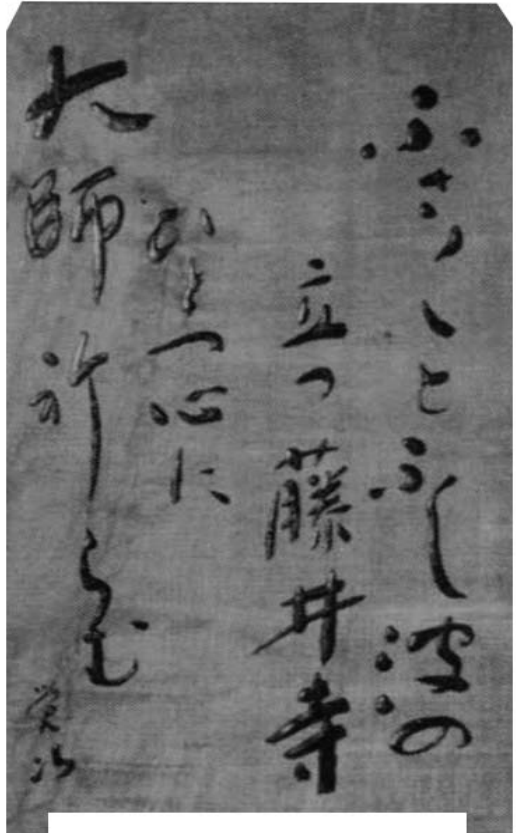


第十一番 藤井寺

ふさふさと ふじ波の立つ 藤井寺 ひとつ心に 大師祈らむ

ふじ・庭に藤棚があり花が波のようにゆれる。

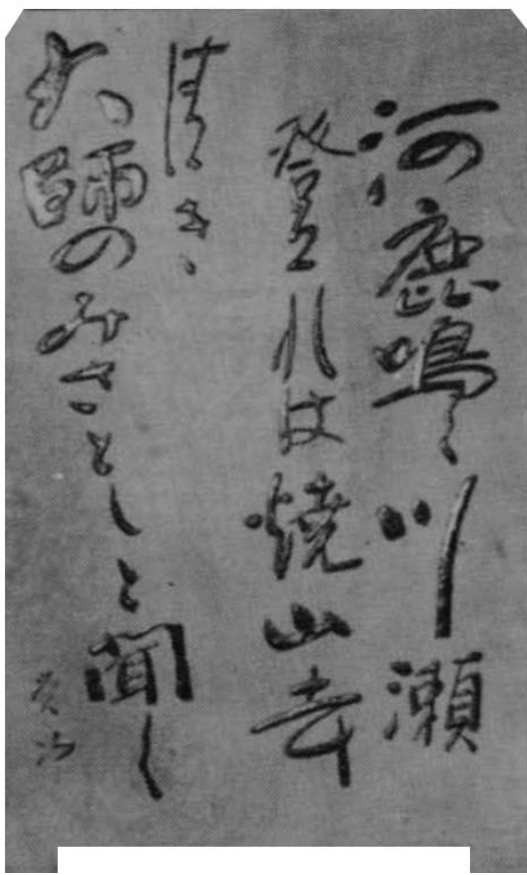
ひとつ心・一心に。



第十二番 焼山寺

河鹿鳴く 川瀬登れば 焼山寺 清き大師のみさとしと聞く

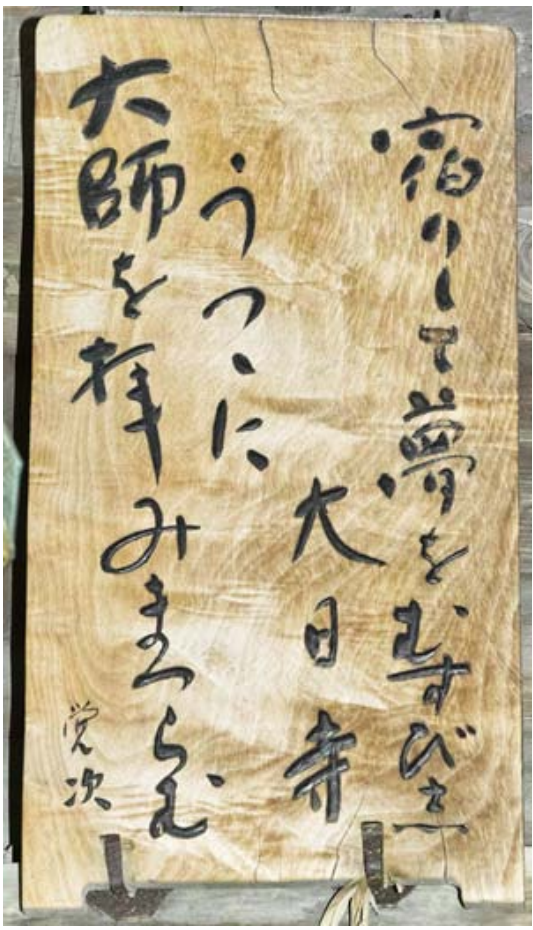
河鹿・かじか。かえるの一種で、山間の溪流にすみ、美声で鳴く。
みさとし・お告げ。



第十三番 大日寺

宿りして 夢をむすびし 大日寺 うつつに 大師を 拝みまつら
む

宿りして・寺に宿泊して。
うつつに・目がさめて。



第十四番 常楽寺

常楽寺 病いやせし あらら木の 大樹のかげに 大師拜がまむ

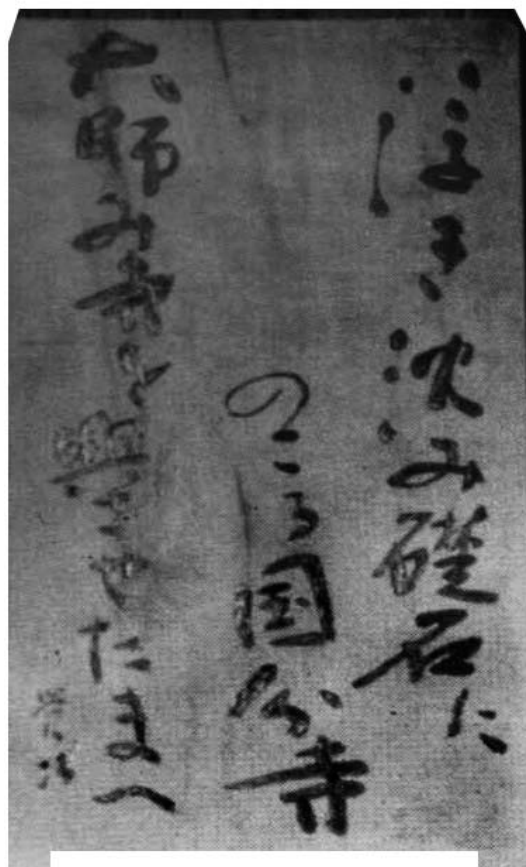
あらら木・庭に病をなおすあらら木がある。一位ともいい、常緑高木。葉は針葉、開花し、実は赤色で食用となる。



第十五番 国分寺

浮き沈み 礎石にのこる 国分寺 大師み寺を 興させ給へ

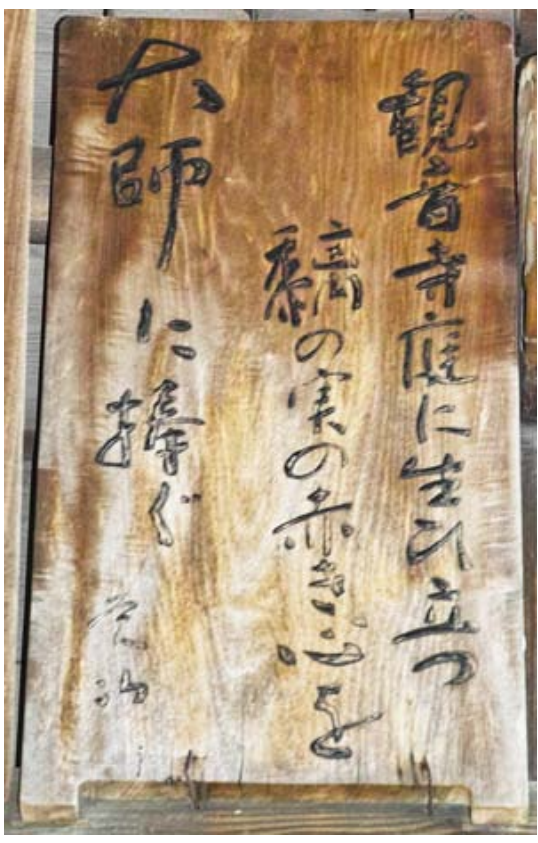
楚石・庭に大きな礎石が見える。天平時代の東大寺式配置の七堂伽藍があつた。国分寺の盛時を思い、感慨がある。興させ給へ・復興させて下さい。



第十六番 観音寺

観音寺 庭に生ひ立つ 藜の実の 赤き心を 大師に捧ぐ

藜・もちの木。常緑喬木淡黄緑色の小花
を開き球形赤色の核果を結ぶ。
赤き心・もちの実の赤いような赤い心。
まじころ



第十七番 井戸寺

井戸寺に 水こそ汲まね おもかげを うつし 大師の 功おもほ
ゆ

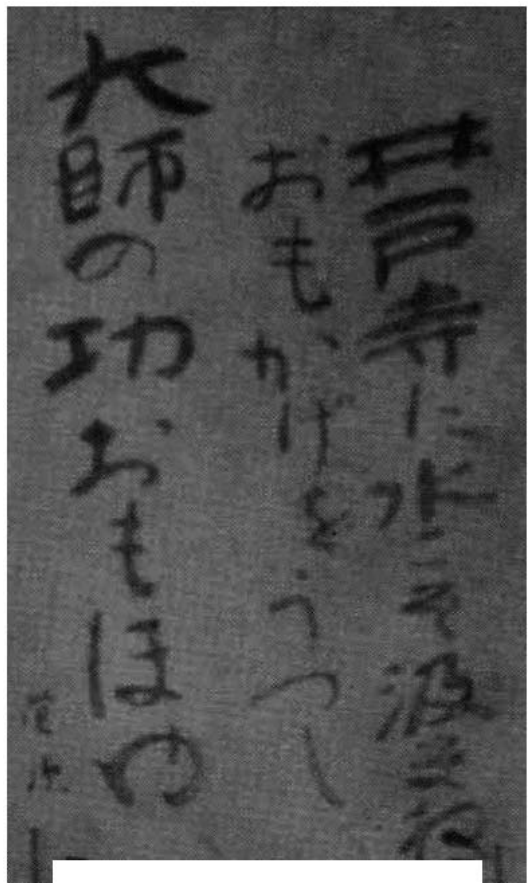
こそ・係の助詞。水を強める。

汲まね・ねは打消の助動詞ずの已然形。私は大師ゆかりの井戸の水はくまないが。

面影・大師のお姿。

功・いさを。功績。

おもほゆ・思われる。

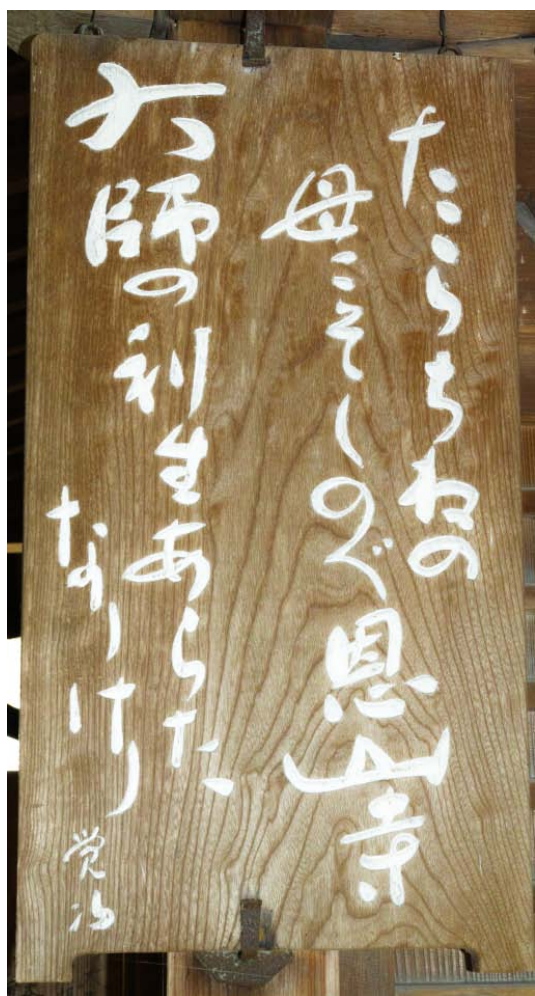


第十八番 恩山寺

たらちねの 母こそしのべ 恩山寺 大師の利生 あらたなりけり

たらちね・母の枕言葉。大師は恩山寺で母君の慈悲を偲はされた伝説がある。人々もこの寺で親の恩をしみじみ思う。利生・りしよう。仏が人々に利益をさずける。

あらたなりけり・大師の靈験がわが心に著しいよ。

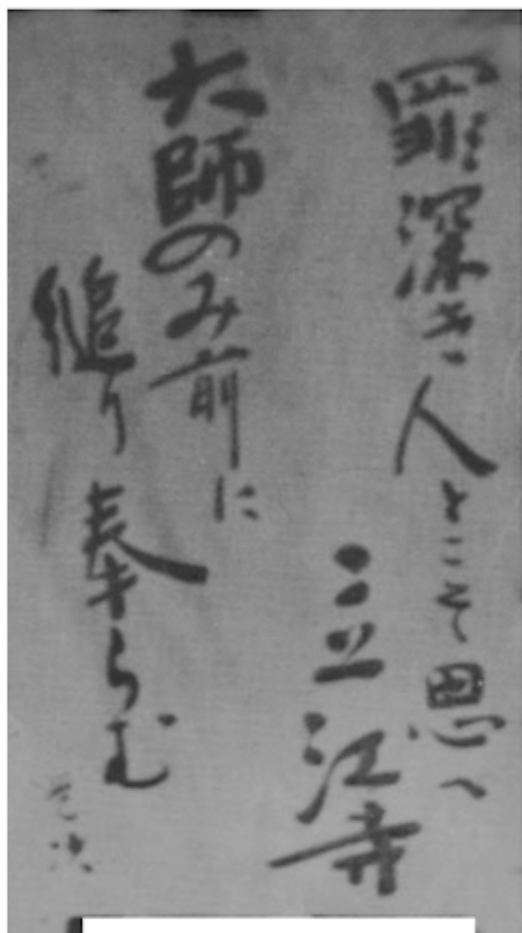


第十九番 立江寺

罪ふかき 人ところ思へ 立江寺 大師のみ前に すがり奉らむ

罪・肉髪付の鈕紐を見、由来を聞くと
私も罪深い人と思う。

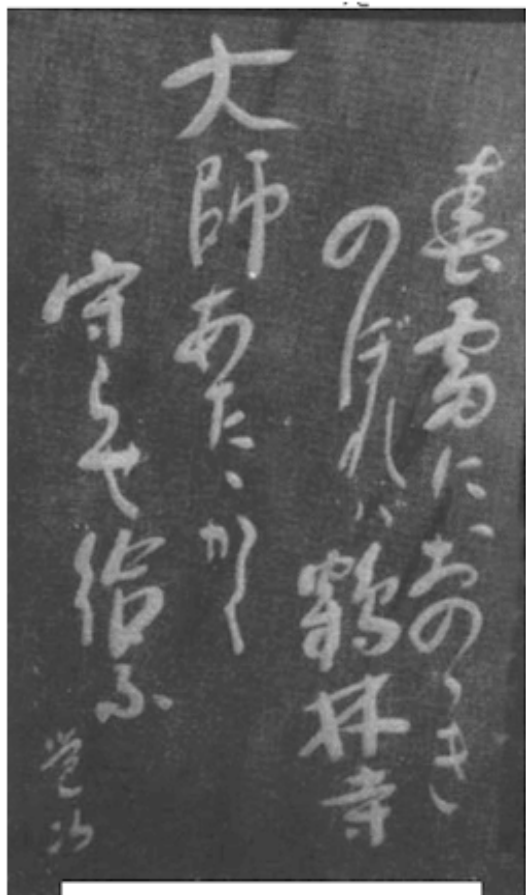
すがり奉らむ・おすがり申そう。



第二十番 鶴林寺

春雷に おののき登れば 鶴林寺 大師あたたかく 守らせ給ふ

春雷・鶴林寺の旧登山道の、大松の
そばえるあたりで俄に春雷にあい、
助けられて書院に宿る。
おののく・おじおそれる



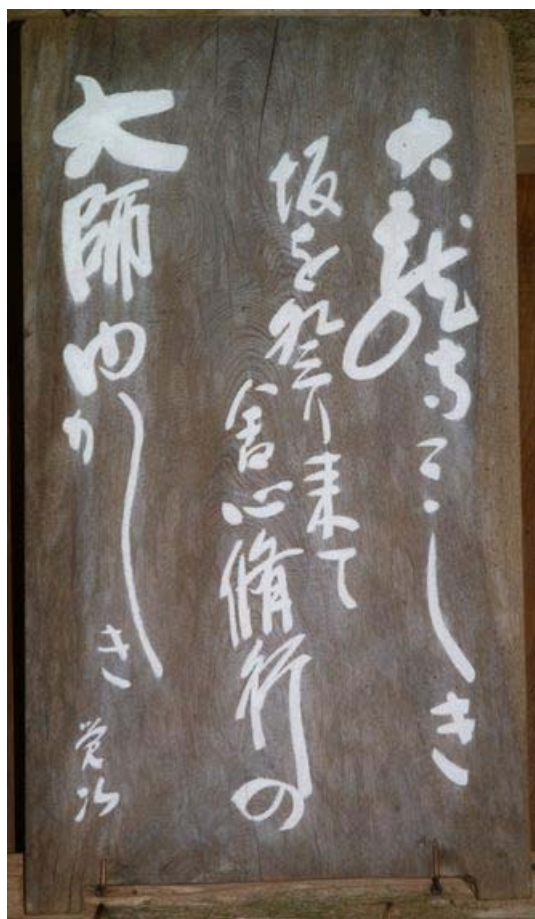
第二十一番 太龍寺

太龍寺 ころしき坂を 登り来て 舎心修行の 大師ゆかしき

ころし・岩のかたまりがころしき重
なっている。

舎心・ころし心が獄の略。大師が心も
身も捨てて修行なされたところ。

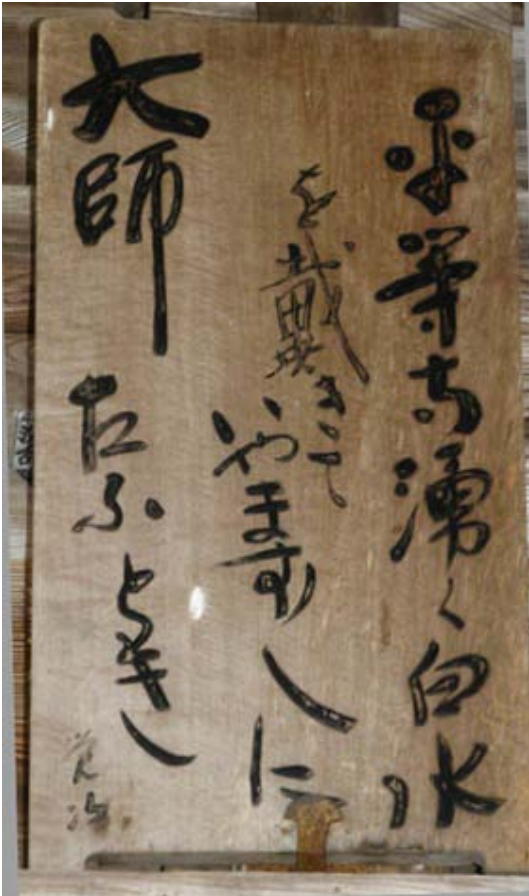
ゆかし・心がひかれ慕わしい。



第二十二番 平等寺

平等寺 湧く白水を 戴きて いやますますに 大師たふとき

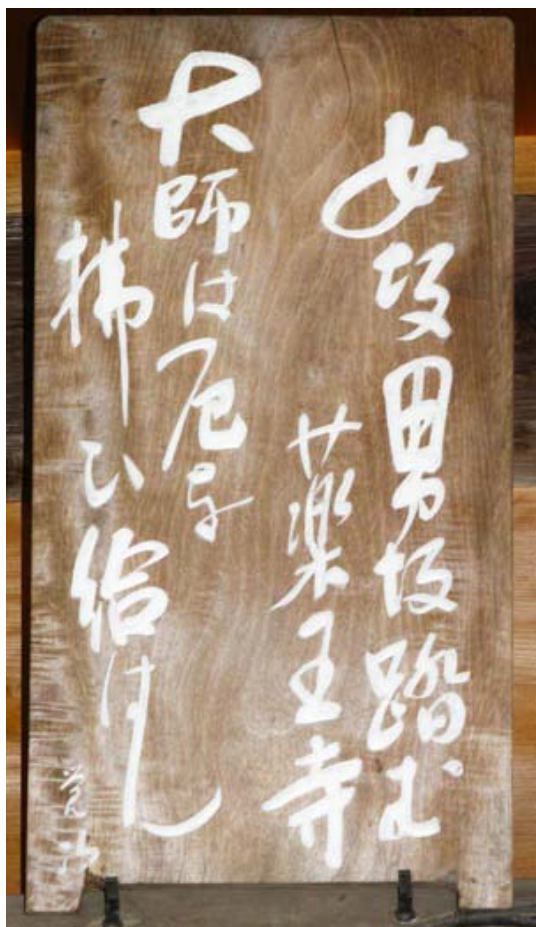
白水・大師加持水を求めて、地を掘らせ給うに乳のように白い霊泉が湧き出た。
いやますますに・いよいよますます。



第二十三番 薬王寺

女坂 男坂踏む 薬王寺 大師は厄を 払ひ給はむ

厄を払ひ給はむ・年齢の数ほど
石階に銭をなげて拝むと厄を払
つて下さるだろう。



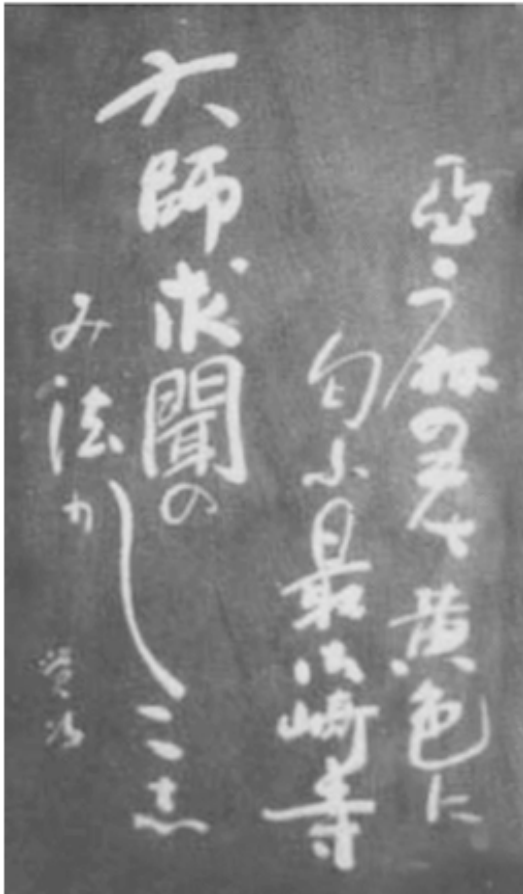
第二十四番 最御崎寺

亜麻の花 黄色に匂ふ 最御崎寺 大師求聞のみ法かしこし

亜麻・一年生草本。葉は線状、夏花をひらく。書院のあたりに繁茂する。

求聞のみ法。大師十九歳のとき、室戸の岬端に断食して、虚空蔵求聞持の法を修し、明星口中に入り、悟をひらかれる。

かしこし、恐れ多く有難い。



第二十五番 津照寺

遍照金剛 唱へて登る 津照寺 大師の加持の 井なむゆかしき

なむ・意味を強める係の助詞で、
従って井の意味を強め、終は、
ゆかしきと連体形で結んで、ゆ
かしいという意味となる。

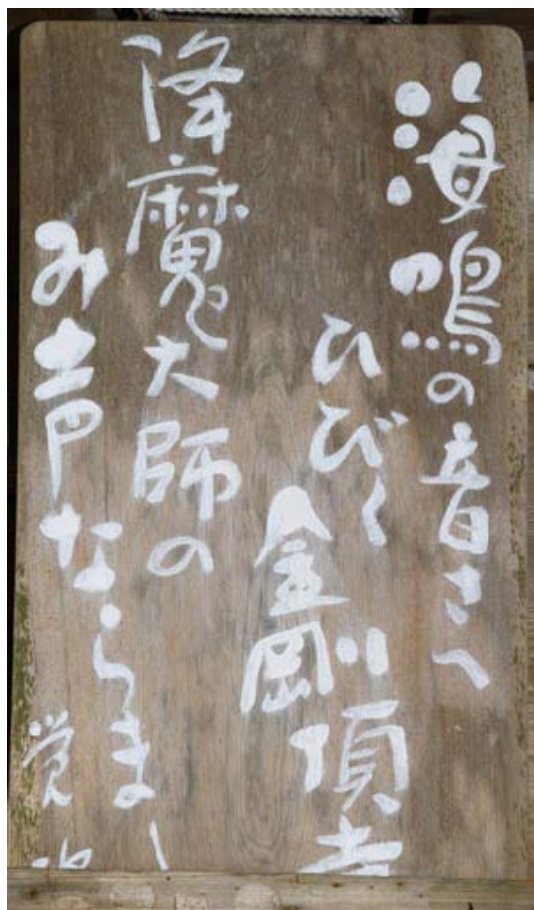


第二十六番 金剛頂寺

海鳴の音さへひびく 金剛頂寺 降魔大師の み声ならまし

海鳴・うみなり。しおの満ちてくる音。寺に登る坂でも、登りつめたところでも海鳴の音が聞え心の奥までしみ入る。

降魔大師・こうまたいし。大師が魔物を、征伏せられた伝説がある。み声ならまし、み声であろう。



第二十七番 神峰寺

神峰寺 古きつたへの食はず貝 大師の奇しき力おもほゆ

食はず貝・登山道にそつた川のせせらぎや岸に貝の化石がある。修行中の大師に人目をおしんで食べられな
いと言ひ、化石となつたと伝える。

奇し・くし。靈妙不思議。

おもほゆ・思われる。



第二十八番 大日寺

日影さす 広前清き 大日寺 大師か
しこむ 真砂に立ちて

広前・神仏の前の庭を敬っていう。

かしこむ・つつしみ尊ぶ。

真砂・まさご、清掃してきれいな
砂の庭。



第二十九番 国分寺

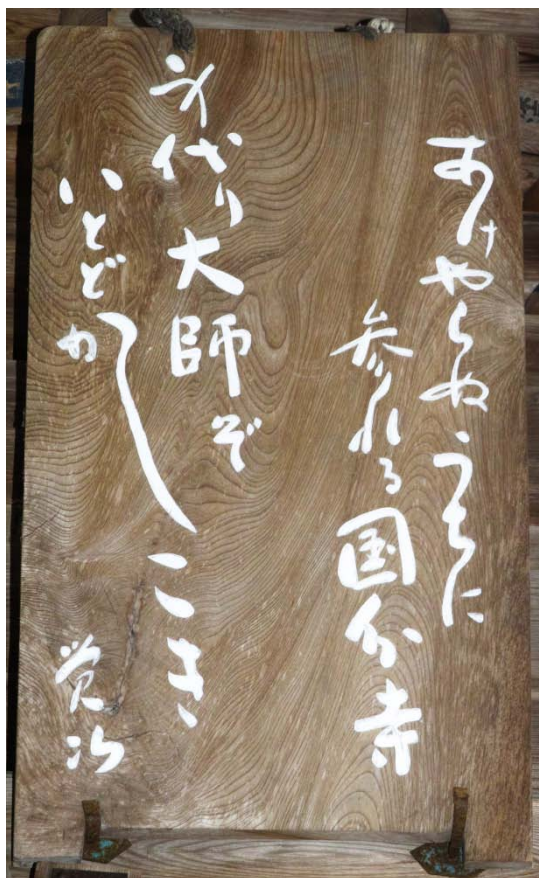
あけやらぬ うちにまゐれる 国分寺 身代大師ぞ いとどかし
こき

あけやらぬうち・御免駅に下車して寺
に参った時は、まだあけきつておらな
かった。

身代大師・人に災難のふりかかる時、
大師が身代りとなって下さる。

いとど・いよいよ。

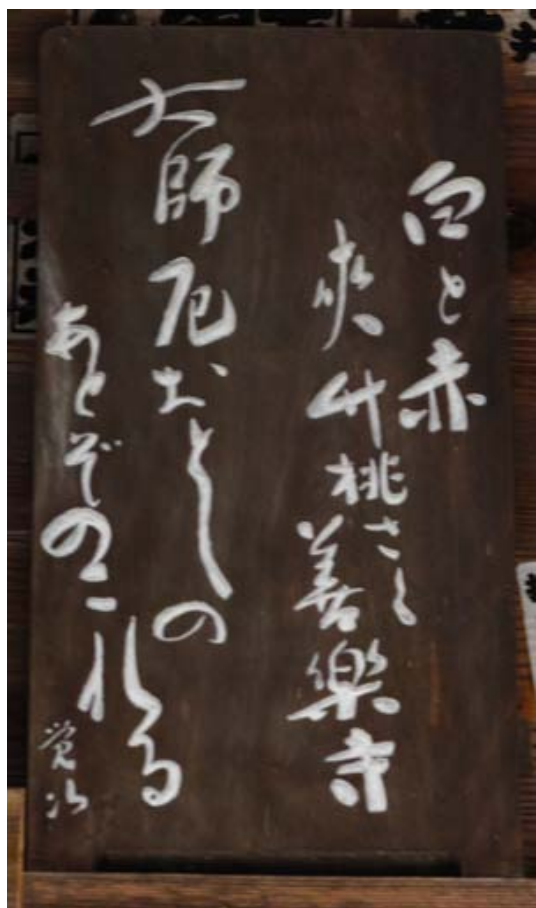
かしこし・尊い。



第三十番 善楽寺

白と赤 夾竹桃さく 善楽寺 大師厄落しの 跡ぞのこれる

厄落し・厄をなくするために加持
祈禱する。大師は四十二才の時、
四国を巡られ、この寺で厄落しを
せられたと伝える。

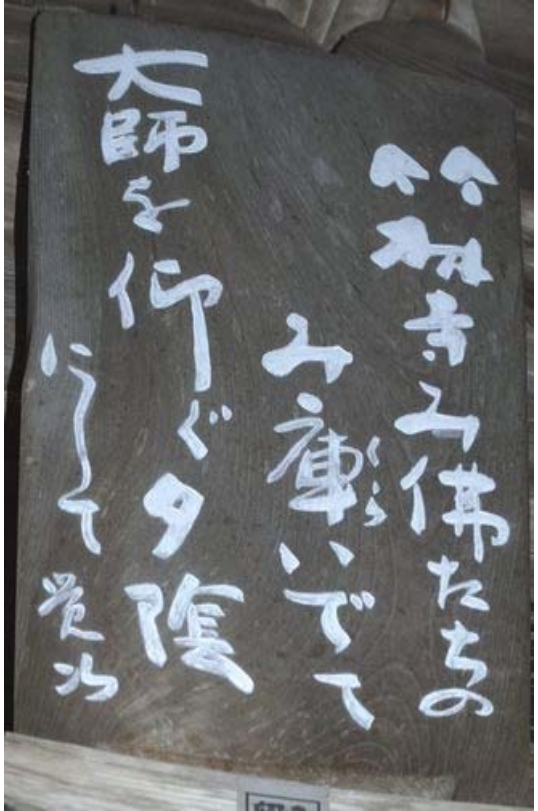


第三十一番 竹林寺

竹林寺 み仏たちの み庫出でて 大師を仰ぐ 夕陰にして

み庫・みくら。多くの仏像を所蔵するく
ら。

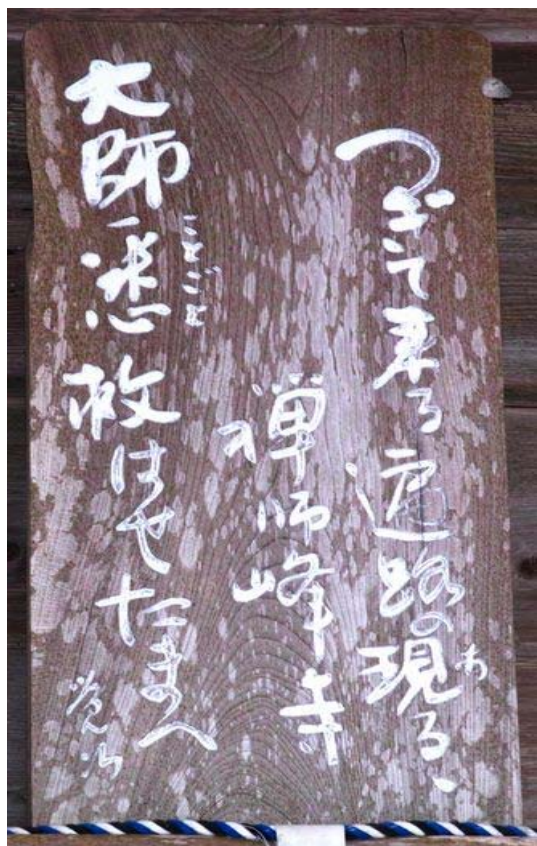
夕陰・夕方日の光。



第三十二番 禅師峰寺

つぎて来る 遍路の現るる 禅師峰寺 大師悉 救はせたまへ

つぎて来る・つぎつぎとつづいて来る。
現るる・あるる。あらわれる。
悉・ことごと。残らずすつかり。



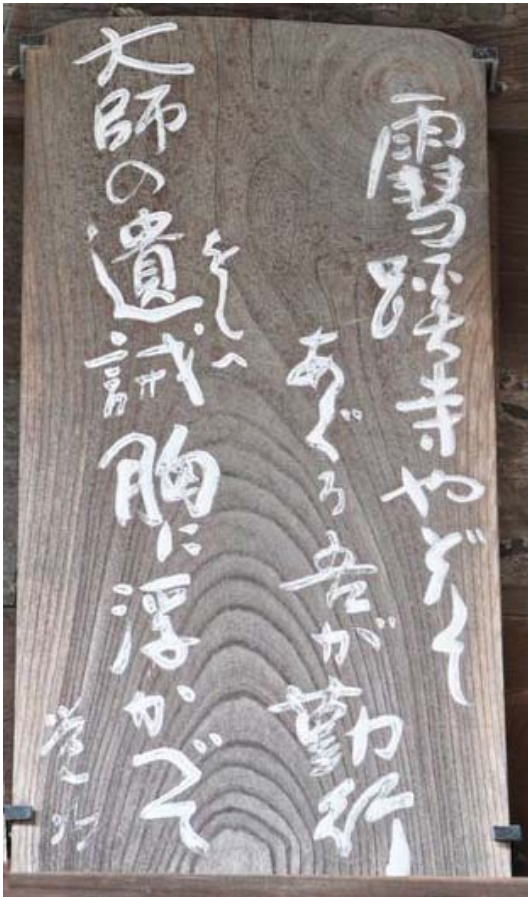
第三十三番雪蹊寺

雪蹊寺 やどりてあぐる 吾が勤行 大師の遺誠 胸に浮かべて

やどりて・寺にとまって。

勤行・ごんぎやう。おつとめ。仏前に読経礼拝をする。

遺誠・いかい。後世の人のために残すいましめ。大師は、菩提を念じつつ自らめぐられた八十八ヶ所の遺跡を毎日めぐられるとの言葉をのこされた。

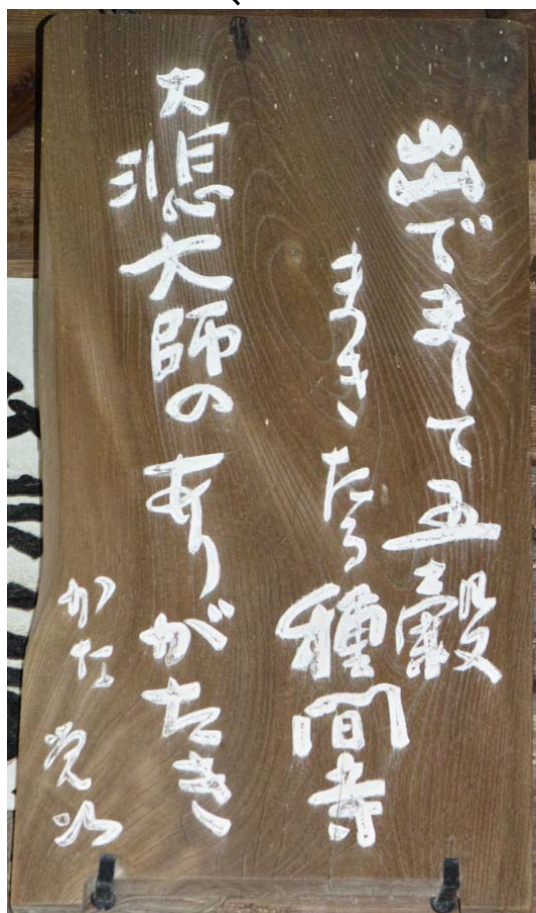


第三十四番 種間寺

出でまして 五穀まきたる 種間寺 大悲大師の ありがたきか
な

出でまして・大師がお出ましになって。
五穀まきたる・五穀の種をまいて人を
救ったという。

大悲大師・悲は苦を除くことで、ひろく
かぎりないつくしみある大師の意。



第三十五番清瀧寺

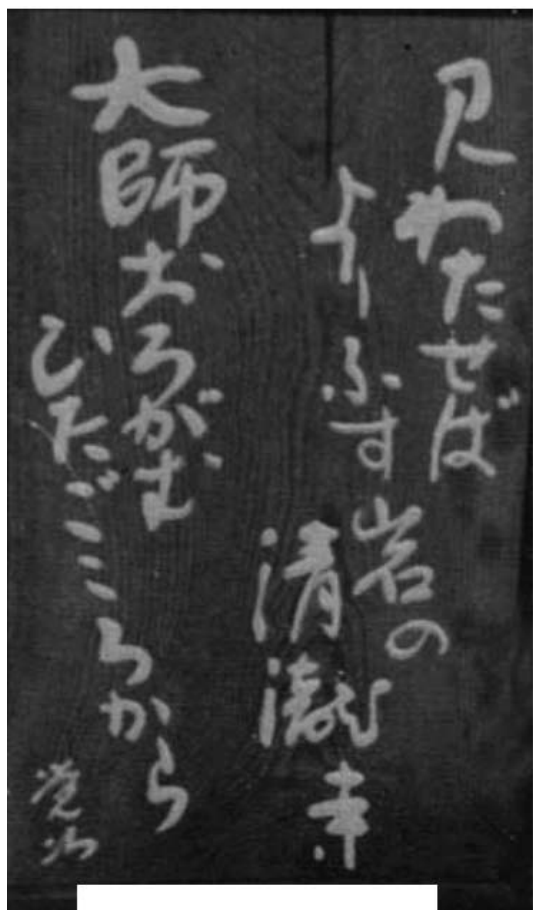
見わたせばよりふす岩の清瀧寺 大師をろがむひたごころから

よりふす岩より集つて横になる岩。

本堂の臺の上に見える。

をろがむ・おがむ。

ひたごころ・ひたむきで純一の心。

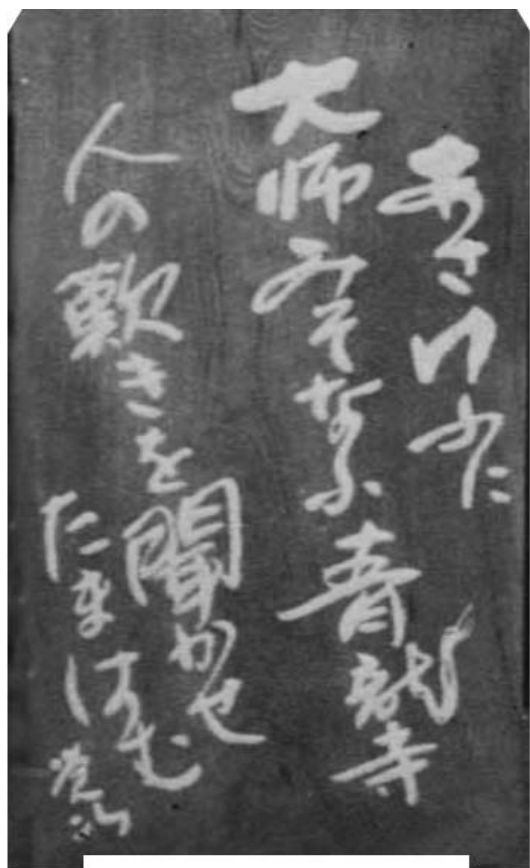


第三十六番青龍寺

あさゆふに 大師みそなふ 青龍寺 人の歎きを聞かせたまはむ。

みそなふ・みそなはず。見るの尊敬体
ごらんになる。

歎き・なげき。哀願するごと。



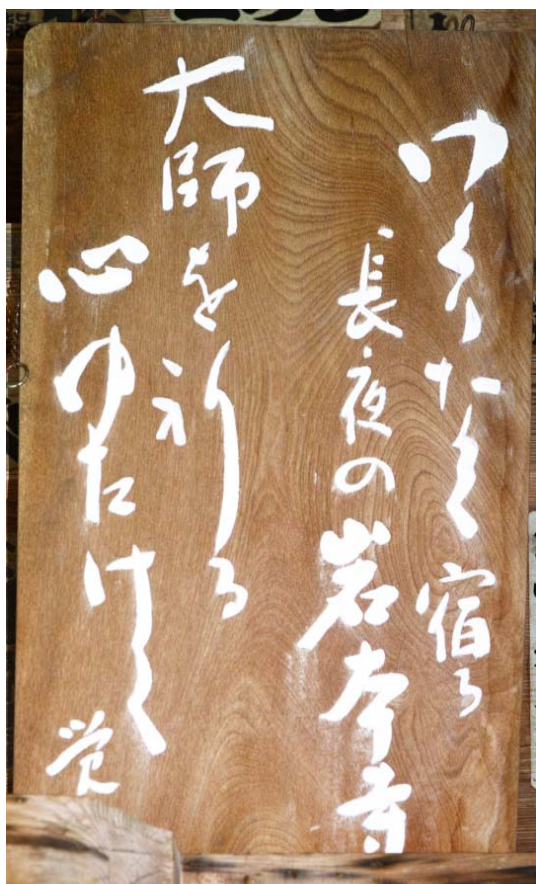
第三十七番岩本寺

ゆくりなく・宿る長夜の 岩本寺 大師を祈る 心ゆたけく

ゆくりなく・思ひがけなく。

長夜・ながよ。よなが。秋岩本寺でと
まった。

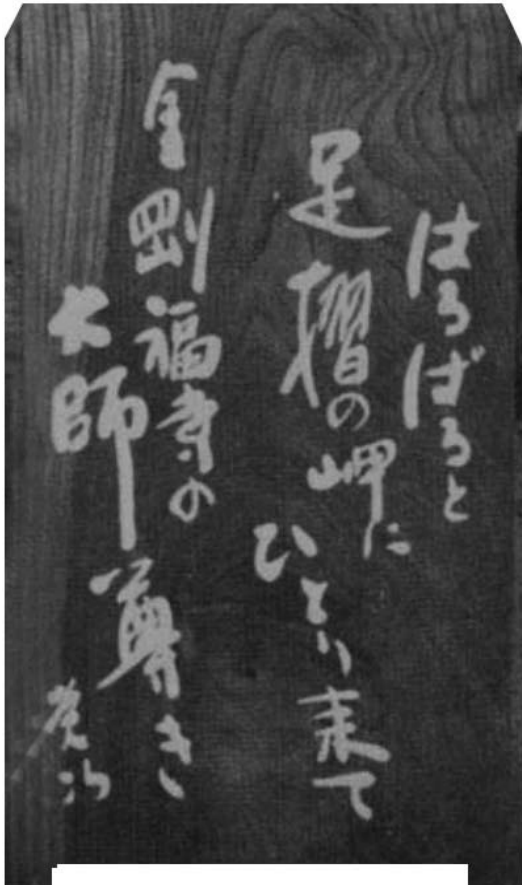
ゆたけく・ゆつくりおちついて。



第三十八番 金剛福寺

はるばると 足摺の岬に ひとり来て 金剛福寺の 大師たふと
き

はるばると・お遍路はこの寺に参り
亜熱帯の植物を見、青黒い大平洋の
黒潮を眺めるとはるばる来た情が湧
いて大師が一層有難く思われる。



第三十九番 延光寺

春雨の あしたまいれる
延光寺 大師を祈る この静けきに

静けきに・野山が霞み渡り糸のような
小雨の降る静かな時に。



第四十番 観自在寺

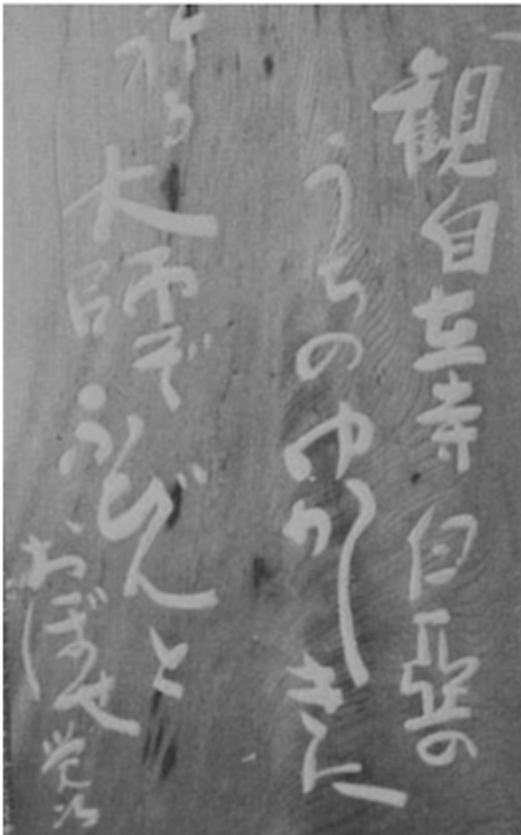
観自在寺 白亜のうちの
ゆかしきに 祈る大師ぞ
ふびんとお
ぼせ

焼ける前に参り、又婦人達の天幕の下に寄附を願う折にも参る。歌は、白亜の寺になつて参つた折の作。

白亜のうちのゆかしきに・大師が白亜の殿堂にいらせられると思つと心がひかれ慕わしく思うにつけて。

ふびん・かわいそうなこと。

おぼせ・おぼすは思つとの尊敬体。思つて下さい。



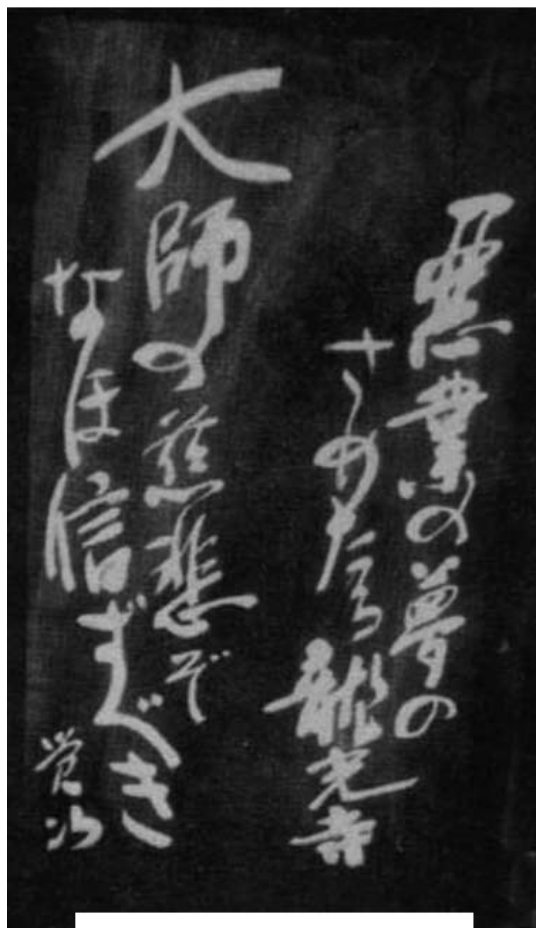
第四十一番 龍光寺

悪業の夢のさめたる 龍光寺 大師の慈悲ぞ なほ信ずべき

悪業の夢・寺に宿泊して殺人の夢
を見る。

なほ・それでも、やはり。

信ずべき・大師の慈悲を信じ頼って
おすがりする。



第四十二番 仏木寺

む つかみどり いやますかげの 仏木寺 大師よるひる 守り給は

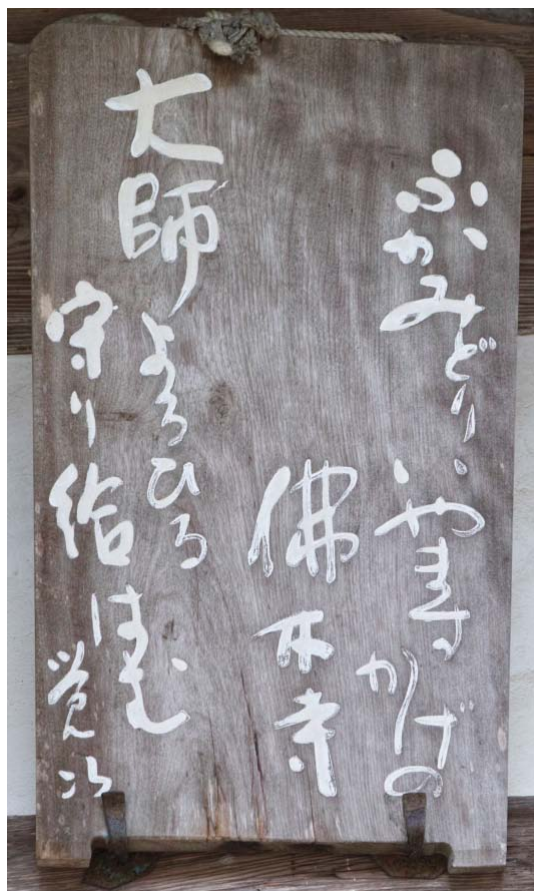
つかみどり・濃い緑。

いやます・いよいよまさる。

かげ・木陰。

大師・二体の大師の大きな坐像を安置する。木像の大師像としては

鎌倉時代の作で日本最古の像である。



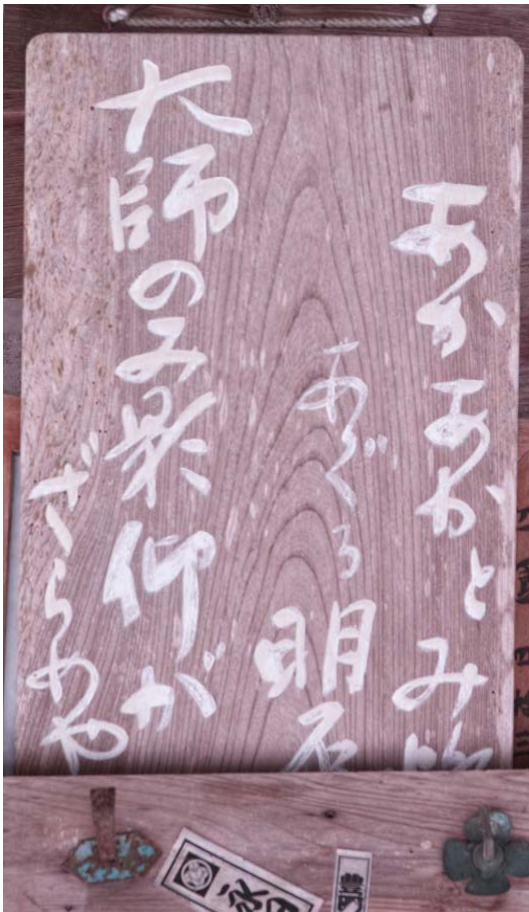
第四十三番 明石寺

あかあかと み燈あぐる 明石寺 大師のみ影 仰がぎらめや

み燈・みあかし。御燈明。

み影・お姿。

仰がぎらめや・仰がなかるうかいや
仰ぎ奉る。



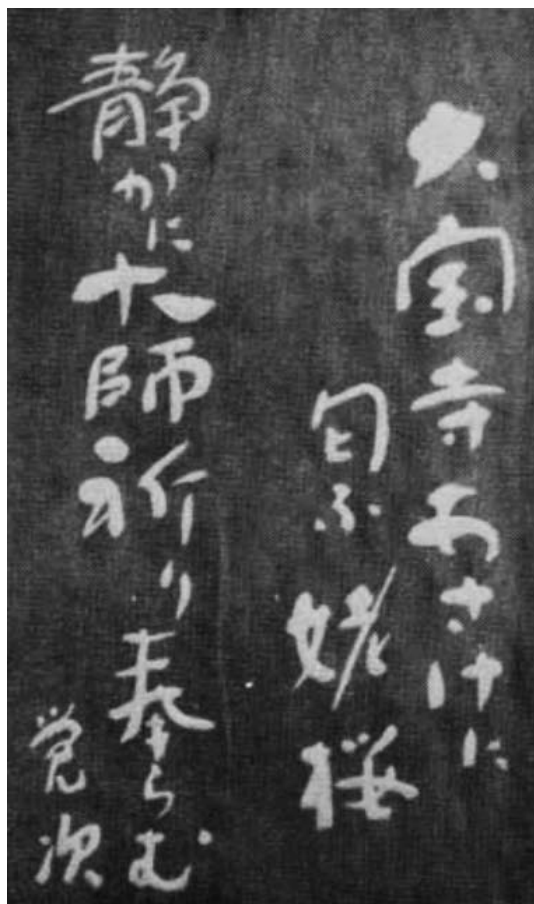
第四十四番 大宝寺

大宝寺 あさけに匂ふ 姥桜 静かに大師 祈り奉らむ

あさけ・夜明け。

匂ふ・にほう。色や香のけはいがうる
わしく立つ。

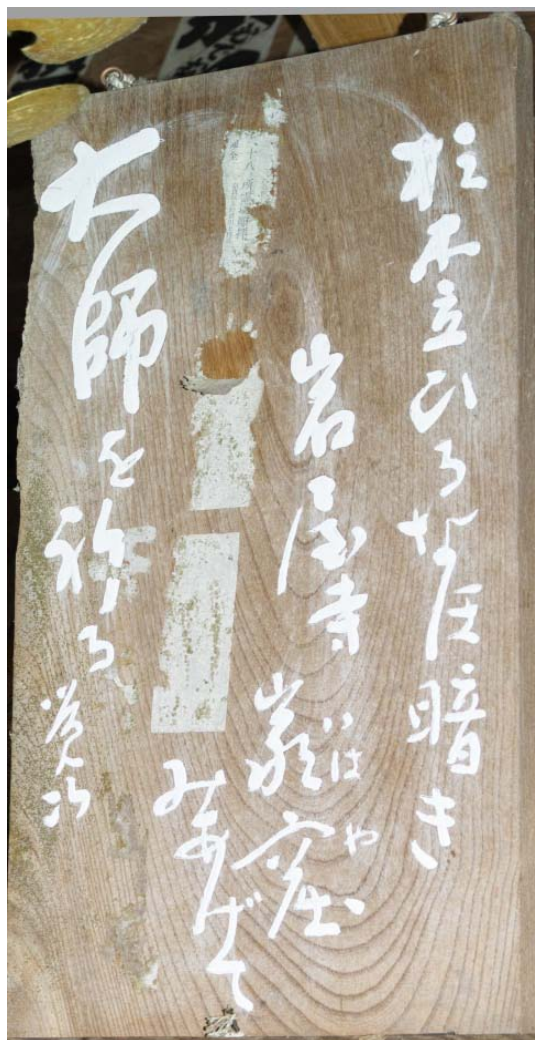
姥桜・うばざくら。寺の庭にある。



第四十五番 岩屋寺

杉木立 ひるなほ暗き 岩屋寺 巖窟みあげて 大師を祈る

巖窟・いわや。岩の間の自然
にできたほらあな。



第四十六番 浄瑠璃寺

白檀の 大樹見あぐる 浄瑠璃寺 大師はおはす 香の奥処に

白檀・びやくだん。常緑喬木。葉は卵形赤色の花を開く。材は白くやや黄、香気が強い。

おはす・居りの尊敬体いらつしやる。

香・こう。奥処・おくか。かは所の意。奥まった処。

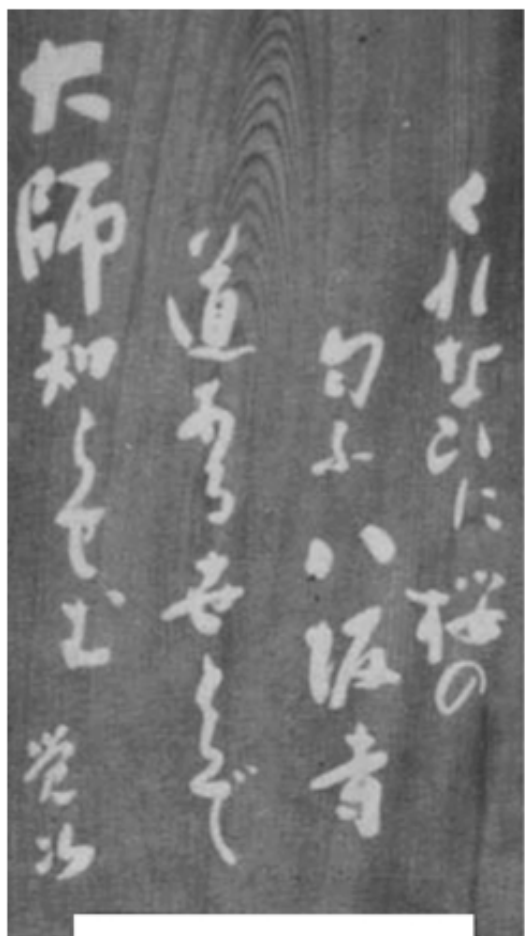


第四十七番 八坂寺

くれなひに 桜の匂ふ 八坂寺 道ある世とぞ 大師知らせむ

桜の匂ふ・桜が咲く。寺の庭に若い
桜の花盛であつた。

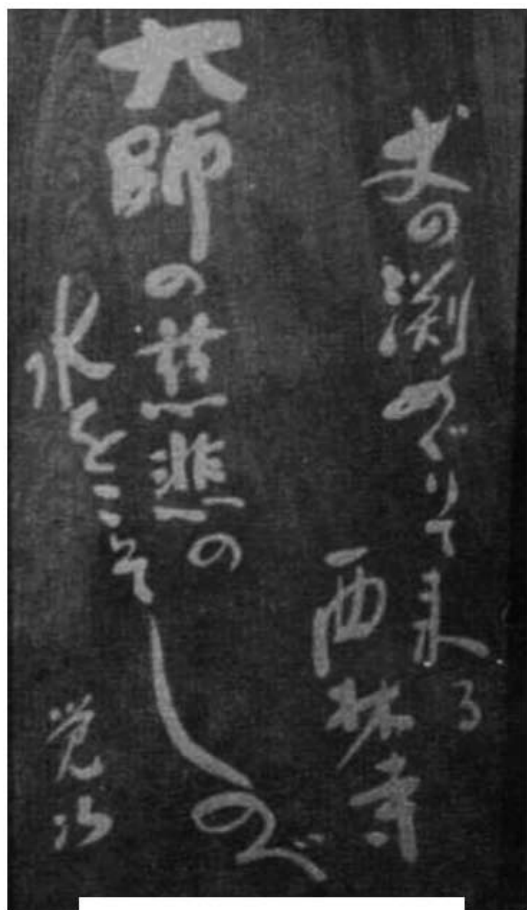
道・仏道。仏教の道。



第四十八番 西林寺

杖の漉 めぐりて来る 西林寺 大師の慈悲の 水をこそしのべ

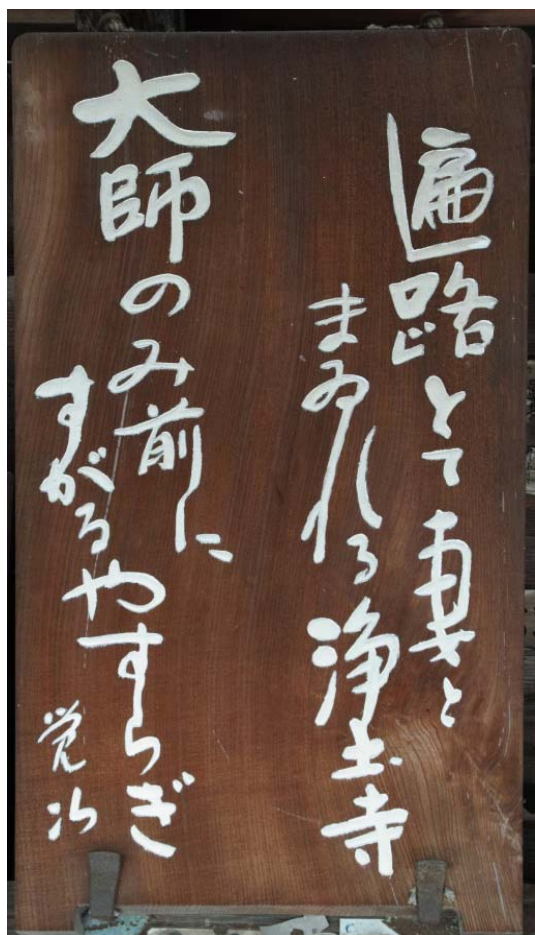
杖の漉・門前の田圃の中に杖の漉とよぶ小池がある。大師旱魃の折雨乞の加持をしてから水が涸れないと伝える。



第四十九番 浄土寺

遍路として妻とまゐれる 浄土寺 大師のみ前にすがるやすらぎ

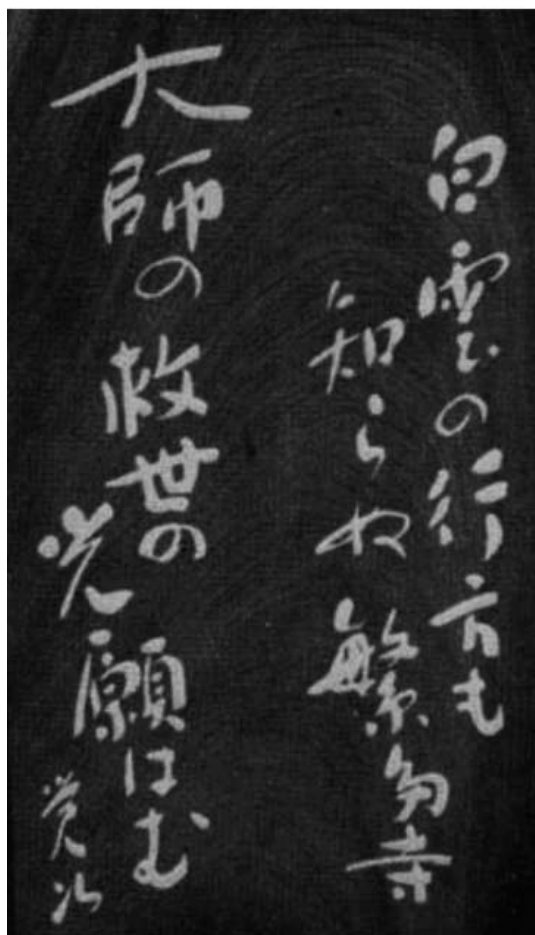
やすらぎ・やすらかに休憩する。



第五十番 繁多寺

白雲の 行方も知らぬ 繁多寺 大師の救世の 光願はむ

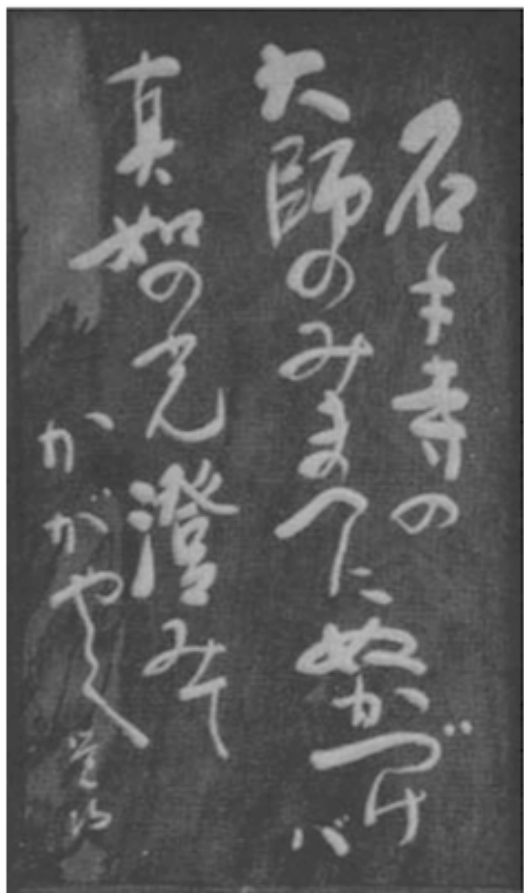
救世・くぜ。仏語世の人を救う。
光・恵み。おかげ。寺のある山には
白雲がどこゆくともなく流れてい
るが人も白雲のように、はかなく
この世をさまよっている。どうか大
師のおかげを願がおうの意。



第五十一番 石手寺

石手寺の 大師のみまへに
ぬかづけは 真如のひかりすみて
かがやく

ぬかづく・ひたいを地につけて拝礼す
る。
真如・しんによ。仏語、永久不変の真
理。



第五十二番 太山寺

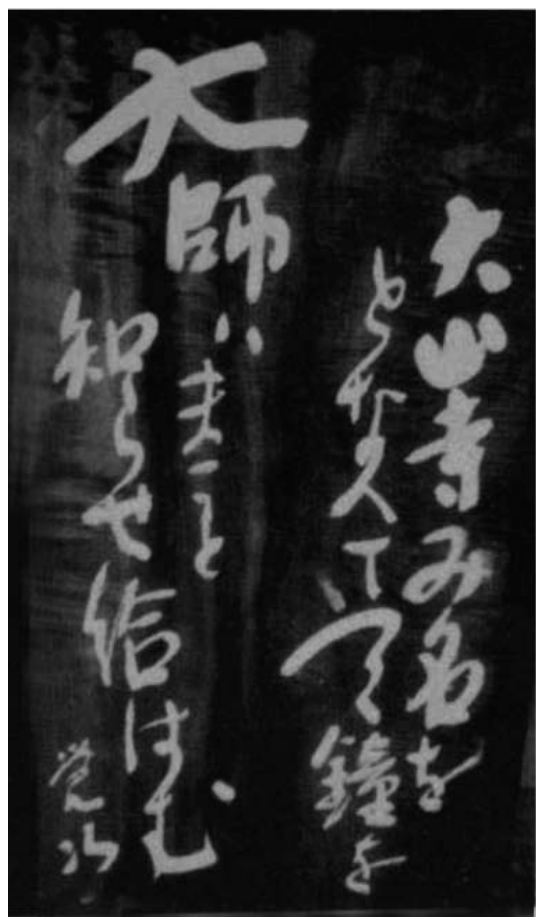
太山寺 み名をとなへて つく鐘を 大師はまこと 知らせたまはむ

み名をとなへて・南無大師遍照金剛
ととなえて。

つく鐘を・私がつく鐘だから。

大師はまこと・大師は私のまこと
を。

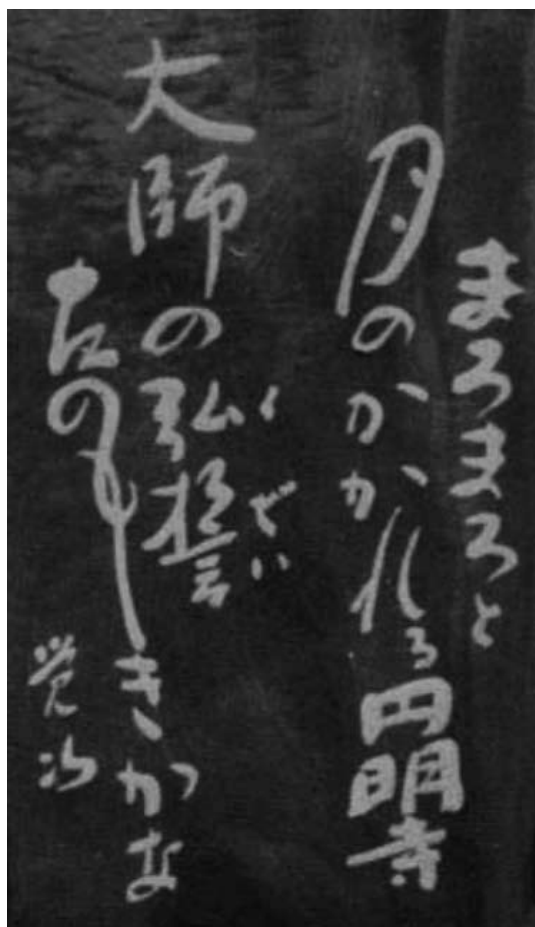
知らせたまはむ・お知りなされるであ
ろう。



第五十三番 円明寺

まろまろと 月のかかれる 円明寺 大師の弘誓 たのもしきか
な

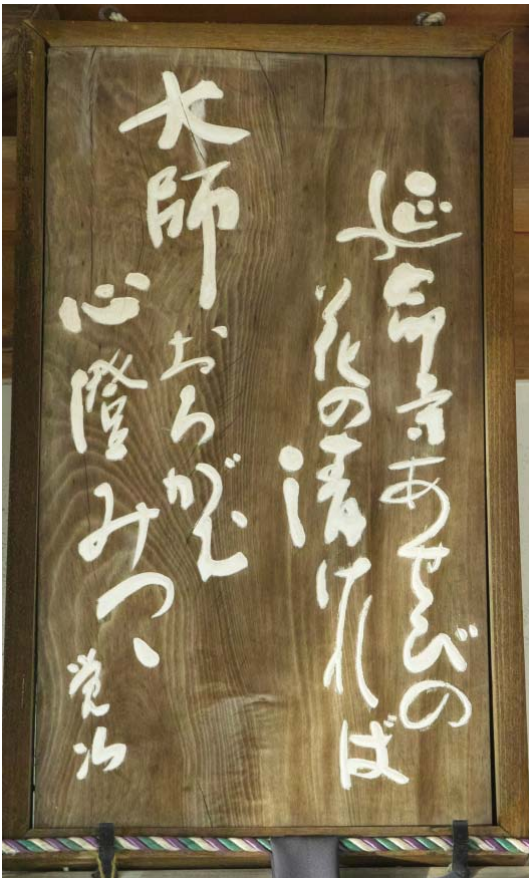
弘誓・ぐぜい。仏が広く衆生を救お
うとする誓。



第五十四番 延命寺

延命寺 あせびの花の 清ければ 大師をろがむ 心澄みつつ

あせび・常緑灌木。樹皮は痛色春壺形の小白花を総状につけ、大師堂に登る石段に繁茂する。をろがむ・おがむ。



第五十五番 南光坊

蚊袋のやぶれをつたふ 南光坊 大師のみまへに 安らふ諸人

蚊袋のやぶれ・寺僧言うこの附近に蚊の多いのは大師蚊をあわれみて、蚊袋を破り給いし故なりと。

安らふ・休む。

諸人・もろびと。多くの人。大師堂には一年中人々将碁をさして、楽しんでい

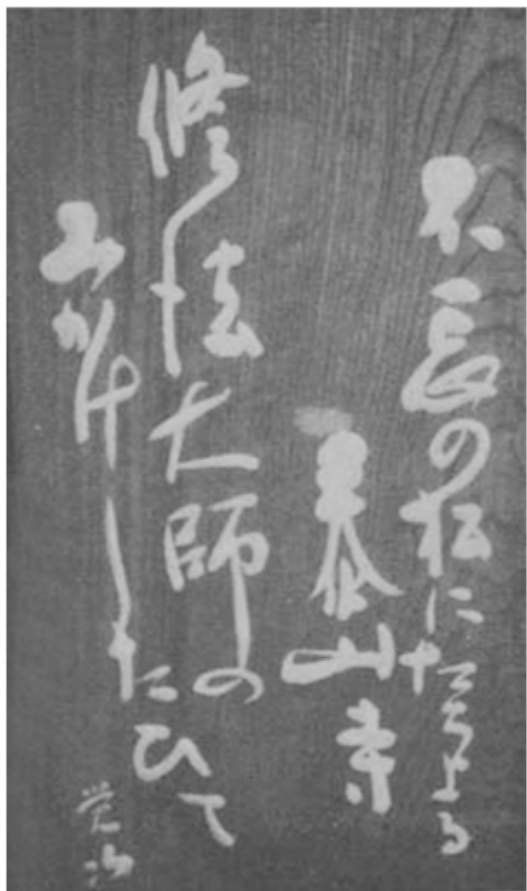


第五十六番 泰山寺

不忘の松にたちよる 泰山寺 修法大師のみかげしたひて

不忘・わすれず。不忘の松・大師が総社川の氾濫に、土砂加持の秘法を修せられ、その地に不忘の松を植え寺を建てられた。

みかげ・み姿。



第五十七番 宋福寺

感得のみ仏みます 栄福寺 大師を祈る 鰐口鳴らして

感得・かんとく。信仰のまごころが
仏に通じる。

み仏・弘法大師の御感得の阿弥陀
如来がこの寺の御本尊と伝える。

鰐口・わにぐち。大師堂の軒下にか
かり打ち紐で鳴らす。

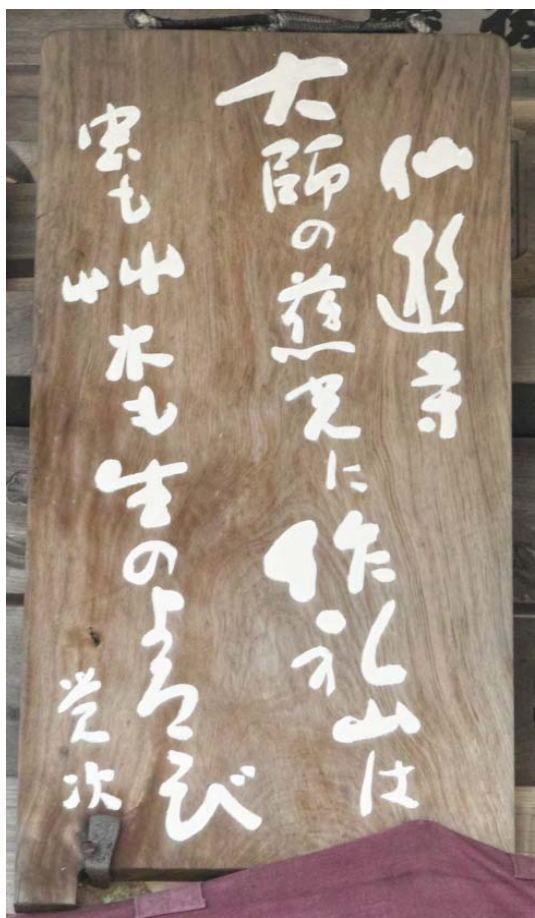


第五十八番 仙遊寺

仙遊寺 大師の慈光に 作礼山は 虫も草木も 生のよろこび

慈光・じこう。衆生や生物を見る仏の慈悲深い恵みの光。

虫・参詣の折大師堂で虫が生まれた。



第五十九番 国分寺

土用の土 踏みてまゐれる 国分寺 かはきし松は 大師しのば
しむ

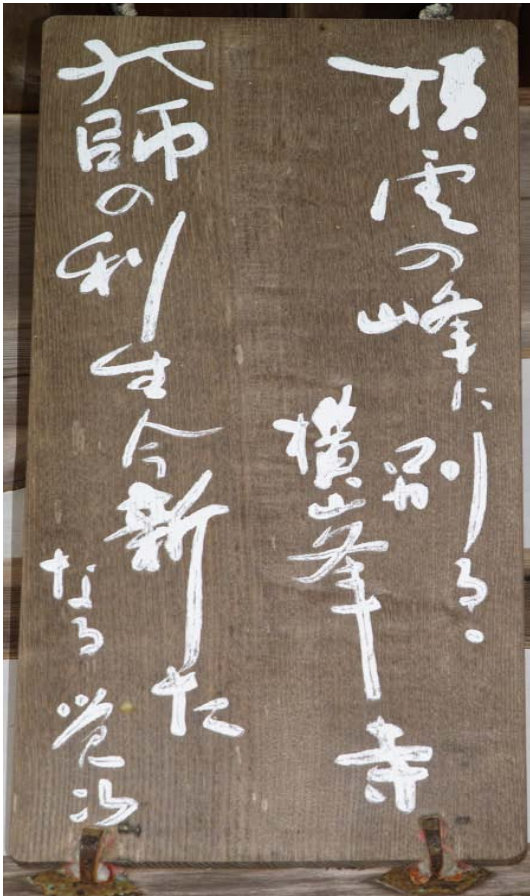
しのばしむ・思い慕わさせる。大師
が巡錫して、修行なされた御苦労
が、思い慕われる。



第六十番 横峰寺

横雲の峰に別るる 横峰寺 大師の利生 いま新たなる

横雲・明けがたに東の空にたなびいてる雲。
利生・りしよう。仏が人々に利益をさずける。



第六十一番 香園寺

をさならに 道をたづねて 香園寺 大師やすらかに 生まさせ
給へ

をさな・幼。子どもたちに道を訪ねて。

子安大師。子供をさづけ、安産の願をかなえる大師。大師堂その他に子供の写真が幾千と掲げてある。

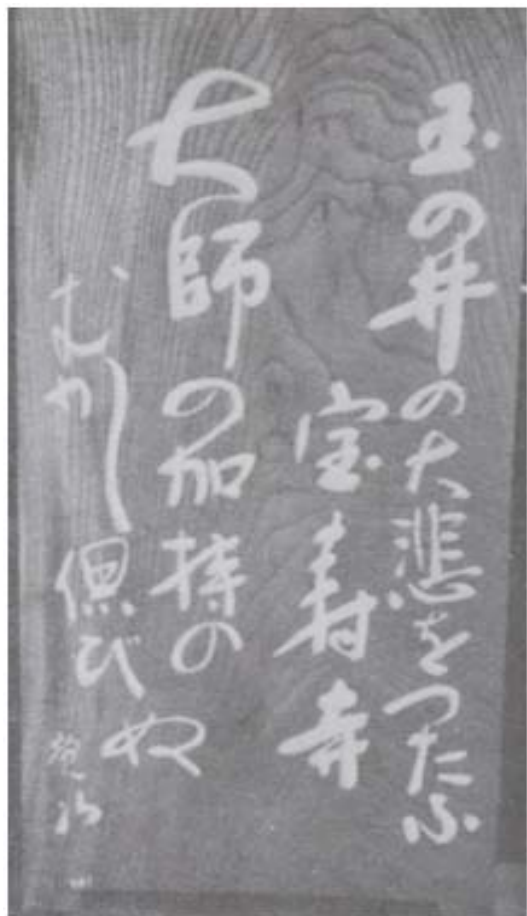


第六十二番 宝寿寺

玉の井の 大悲をつたふ 宝寿寺 大師の加持の おかし俣びぬ

玉の井・大師が難産の夫人に、玉の井の霊水を加持して与え給い男児を授かると伝える。

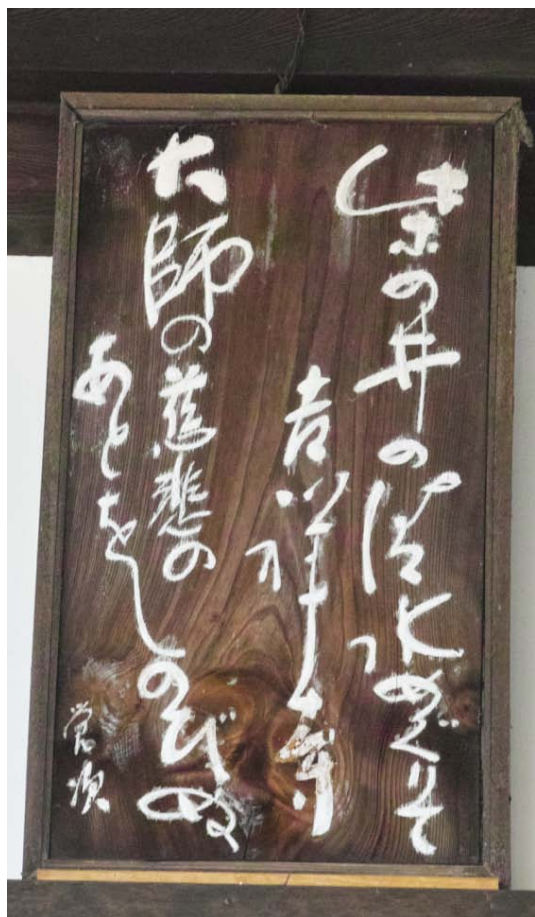
加持・かぢ。真言宗で印を結び金剛杵を握り陀羅尼を唱えて願がかなうように仏に祈る。



第六十三番 吉祥寺

柴の井の 清水めぐりて 吉祥寺 大師の慈悲の 跡をしのびぬ

柴の井・大師が加持水に用いられた井が寺から百米のところにあって、民家の飲料水としている。

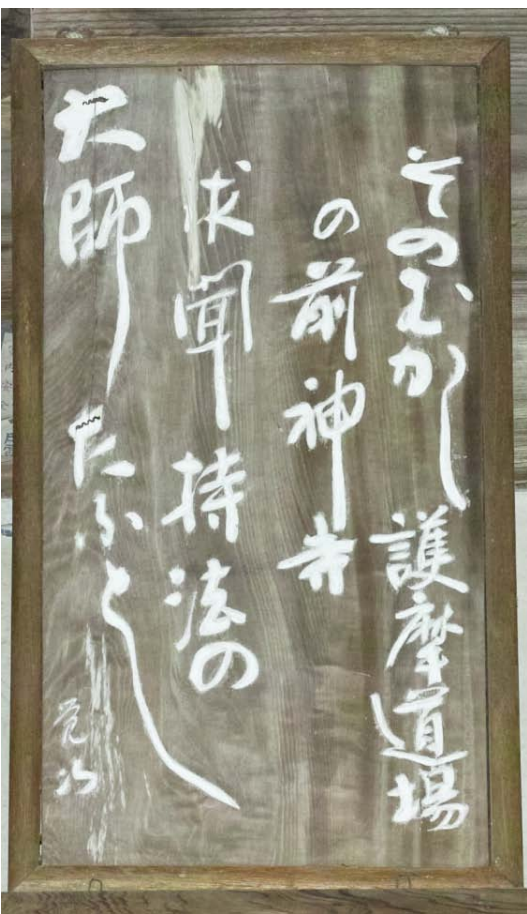


第六十四番 前神寺

そのむかし 護摩道場の 前神寺 求聞持法の 大師たふとし

護摩・真言宗の秘法の一つ。火をたいて仏に祈りいっさいの悪事の根本を焼き尽す。

道場・仏法を修行する所。

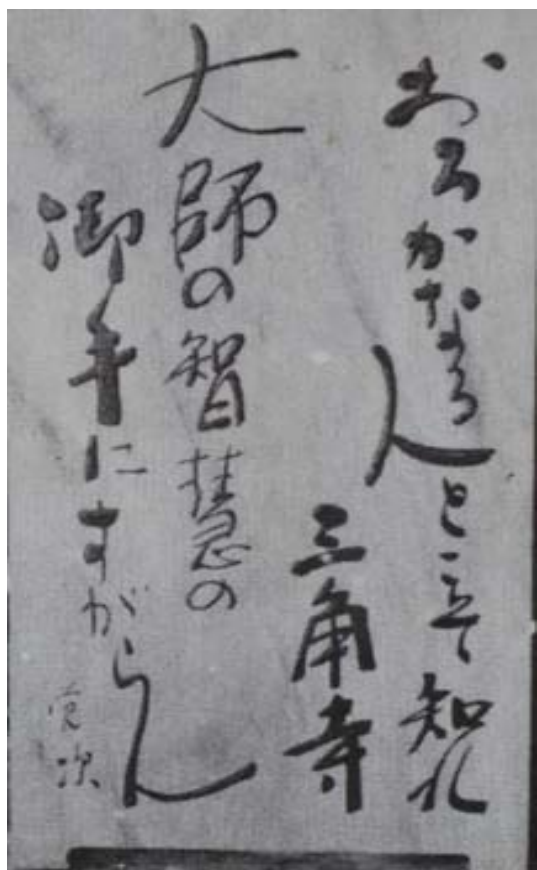


第六十五番 三角寺

おろかなる 人ところ知れ 三角寺 大師の智慧の み手にすが
らむ

おろかなる人とこそ知れ・この寺に参
つて、自分はおろかな人であると知っ
た。

すがらむ・おすがりしよう。



第六十六番雲辺寺

教子の病いやせし 雲辺寺 大師のみ前に ぬかずき奉る

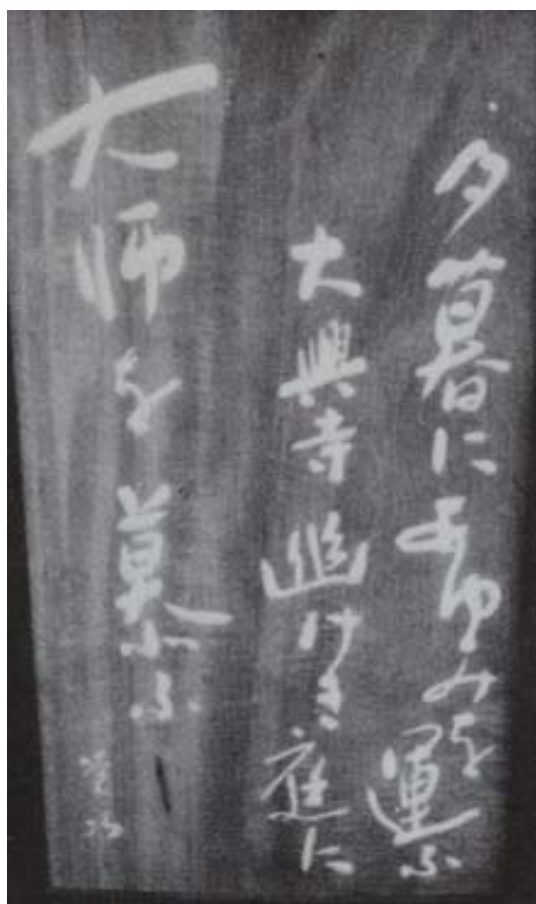
教子・教え子。奉職時代生徒の病気の折は巡礼した。



第六十七番 大興寺

夕暮にあゆみを運ぶ 大興寺 幽けき庭に 大師を慕ふ

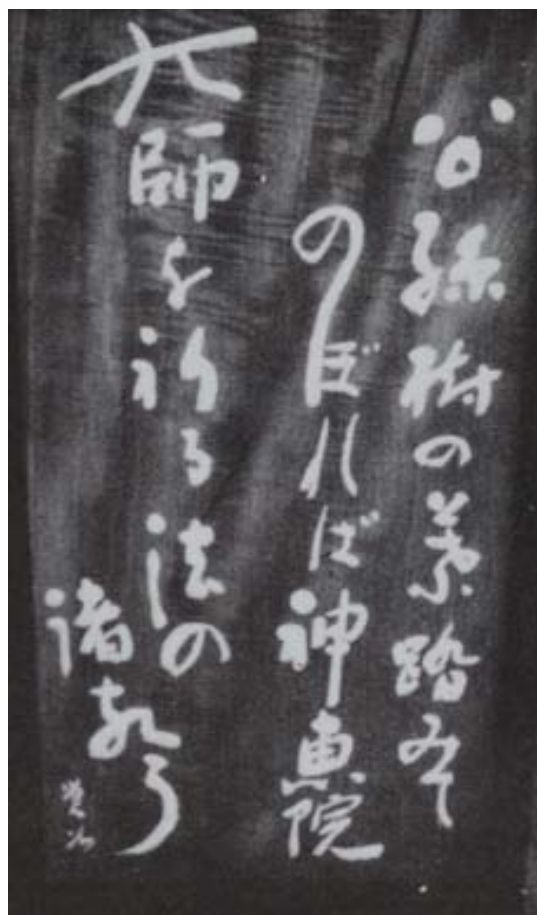
あゆみを運ぶ・歩いて行くこと。
幽けし・かそけし。夕日の光かすか
なこと。



第六十八番 神念院

公孫樹の葉 踏みて登れば 神念院 大師を祈る 法の諸声

公孫樹・いちよう。寺の庭にある。
法の諸声・のりのもろごえ。遍路た
ちがしようみようを唱える声。



第六十九番 観音寺

観音寺 唱名あぐる 吾が声に ほほえみたまふ 大師ならまし

唱名・しようみよう。仏を信仰して、
その名をとなえる。

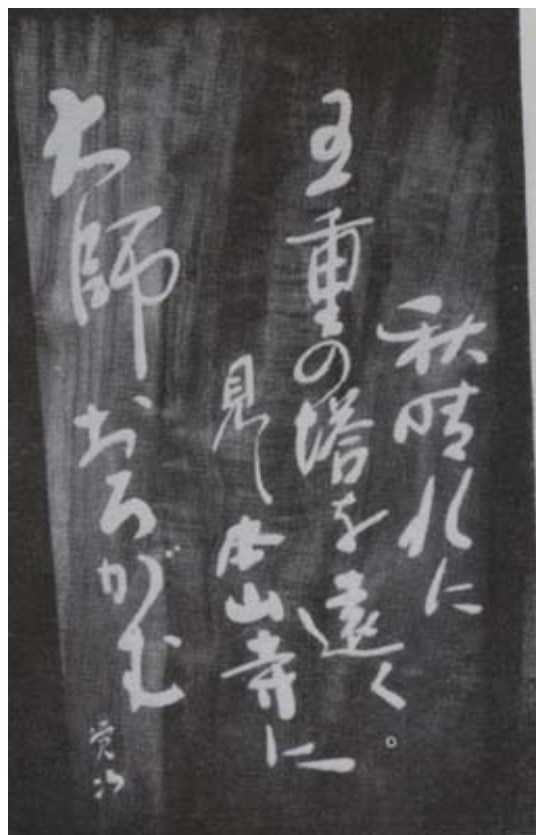
大師ならまし・大師であろう。



第七十番 本山寺

秋晴れに 五重の塔を 遠く見て 本山寺に 大師おろがむ

本山寺に・本山寺にお参りしての意。
おろがむ・おがむ。



第七十一番 弥谷寺

弥谷寺 月の射し入る 石室に 修法大師の み声聞かまし

石室・いしむろ。凝灰岩の山肌をうがって獅子が口を開いて吠える形をする。大師はここで修行せられたと伝える。磨崖仏がある。



第七十二番 曼荼羅寺

曼荼羅寺 庭に生ひ立つ 不老松 大師のみ声を 松風に聞く

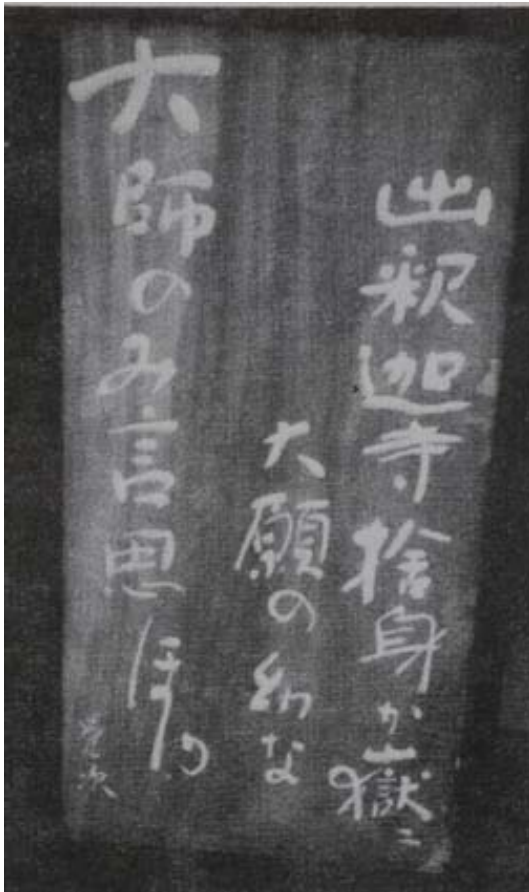
不老松・境内に大師御手植の不老松がある。



第七十三番 出釈迦寺

出釈迦寺 捨身が獄に 大願の 幼な大師の み言思ほゆ

捨身が獄・しゃしんがだけ。寺から山を登って奥院のある岳。大師は七才の折、断崖から捨身の行を修せられた。

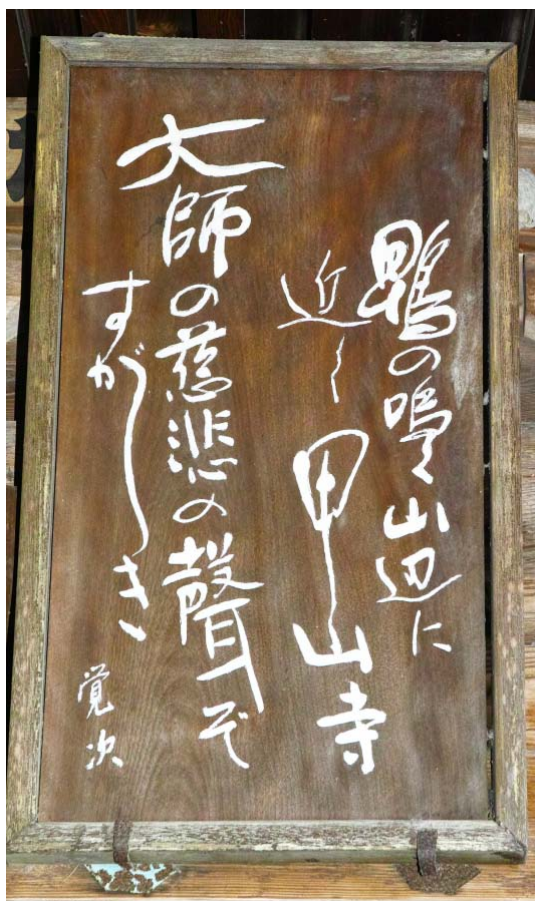


第七十四番 甲山寺

鴨の鳴く山辺に近く 甲山寺 大師の慈悲の 声ぞすがしき

鴨・ひよ。灰色の鳥、胸と腹とは黒
いまだら。

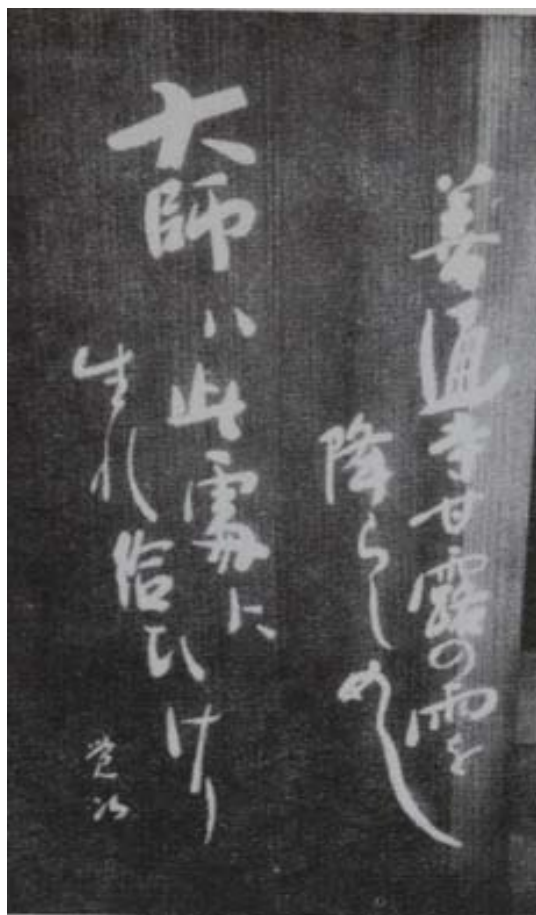
すがし・さわやかで滞りがない。



第七十五番 善通寺

善通寺 甘露の雨を 降らしめし 大師は此処に 生れ給ひけり

甘露・かんろ。大師の徳に天地が感
応して降らす甘い水。
生れ・あれ。生れ給ひけり・お生れ
なされた。



第七十六番 金倉寺

朝明の吾が勤行に 金倉寺 大師の面輪 おもかげにたつ

朝明・あさあけ。あけがた。

勤行・ごんぎよう。きまつた時間に
読経礼拝焼香をする。

面輪・おもわ。顔。

おもかげにたつ・連想せられる。



第七十七番 道隆寺

秋の夜の月にやどりて 道隆寺 大師は夢に見え給ひけり



第七十八番 郷照寺

尋ね来て 変らぬかげの 郷照寺 見し人なみに 燈かかぐ

変らぬかげ・昔参った時と変らない
恩恵を受ける。
見し人なみに・参詣の人々と同じよ
うに。



第七十九番 高照院

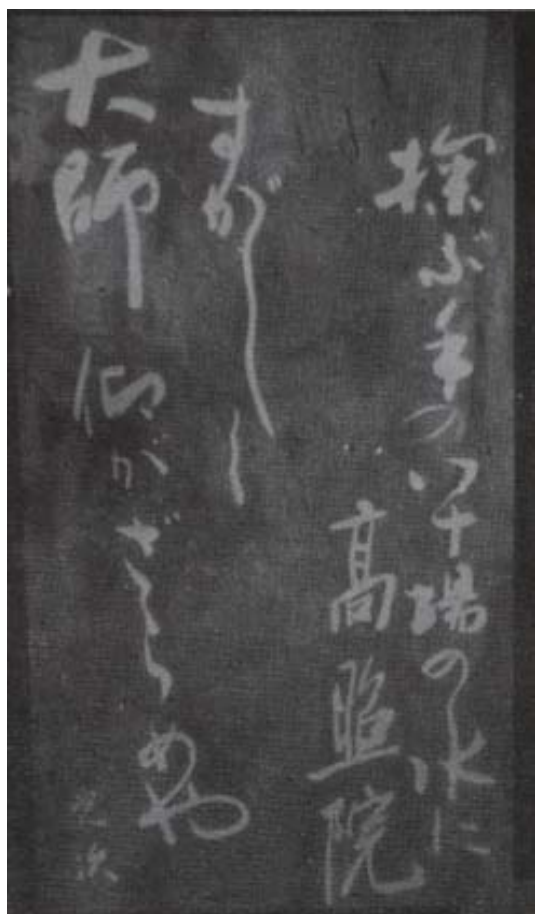
掬ぶ手の 八十場の水に 高照院 すがしく大師 仰がざらめや

掬ぶ・むすぶ。手のひらで水をすくう。

八十場・やそば。寺の西百米、伝説のある清泉。水に・手を洗い口をすすいでの略。

すがしく・すがすがしい気持で。

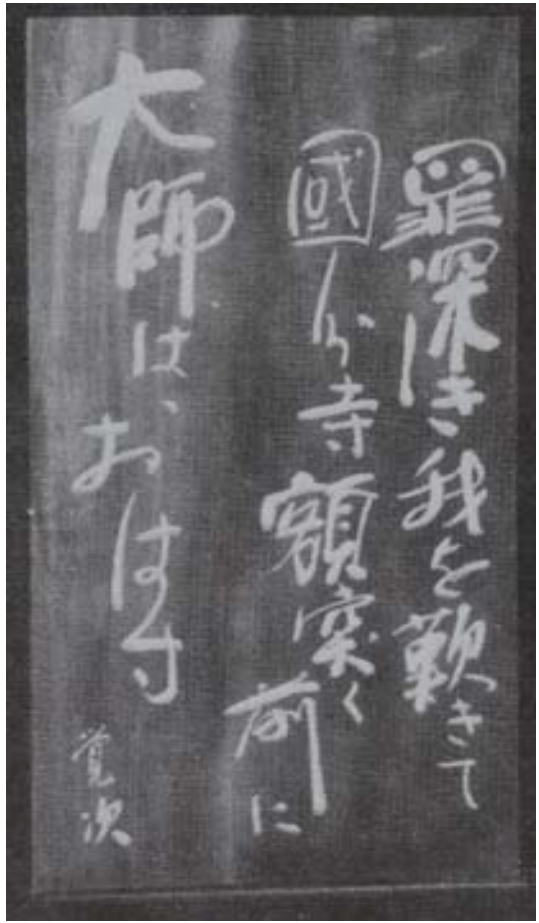
仰がざらめや・仰がないか、いや仰ぎたてまつるよ。



第八十番 国分寺

罪深き 我を歎きて 国分寺 額突く前に 大師はおはす

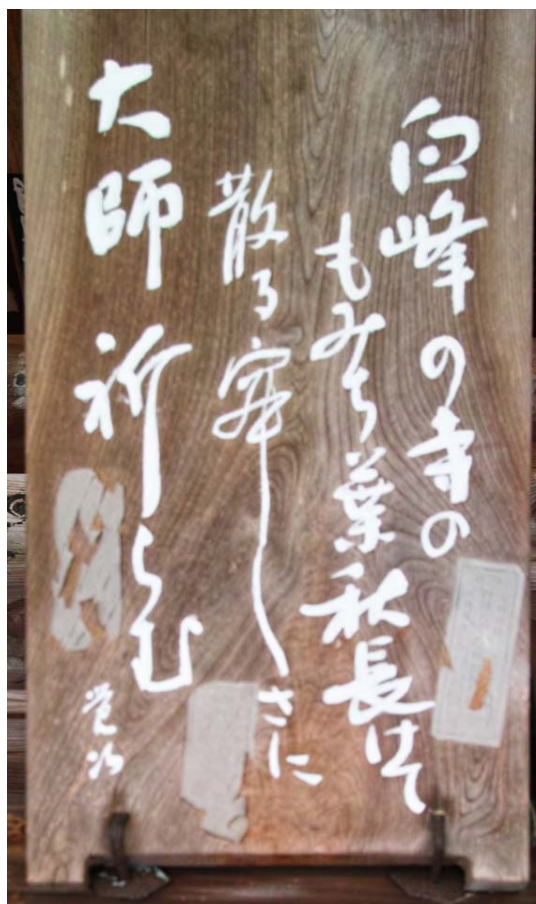
額突く・ぬかづく。 きたいを地につ
けて拝礼する。



第八十一番 白峰寺

白峰の寺のもみぢ葉 秋長けて 散る寂しさに 大師祈らむ

秋長けて・あきたけて。秋の盛りが過ぎて。



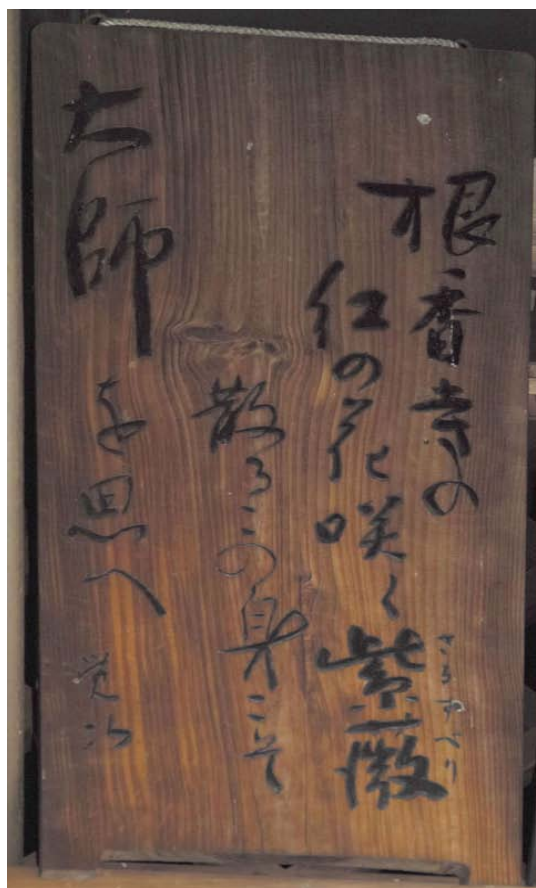
第八十二番 根香寺

根香寺の 紅の花咲く 紫薇 散るこの身こそ 大師を思へ

紫薇・さるすべり。落葉高木、夏から秋にかけて淡紅色の小花が群り咲く。

散るこの身・花の散るように死なねばならぬ自分。

大師を思へ・大師を思う。こそその係助詞があるので思ふを思へと已然形で結ぶ。



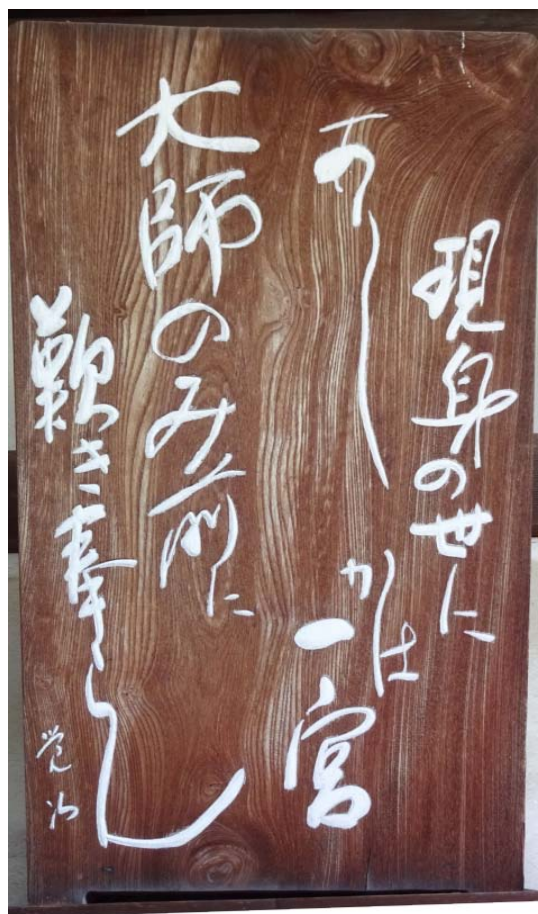
第八十三番 一宮寺

現身の世に有りしかば 一宮 大師のみ前に 歎き奉らん

現身・うつしみ。今生きているこの身。

世に有りしかば・現実の世に生きて
いるので。

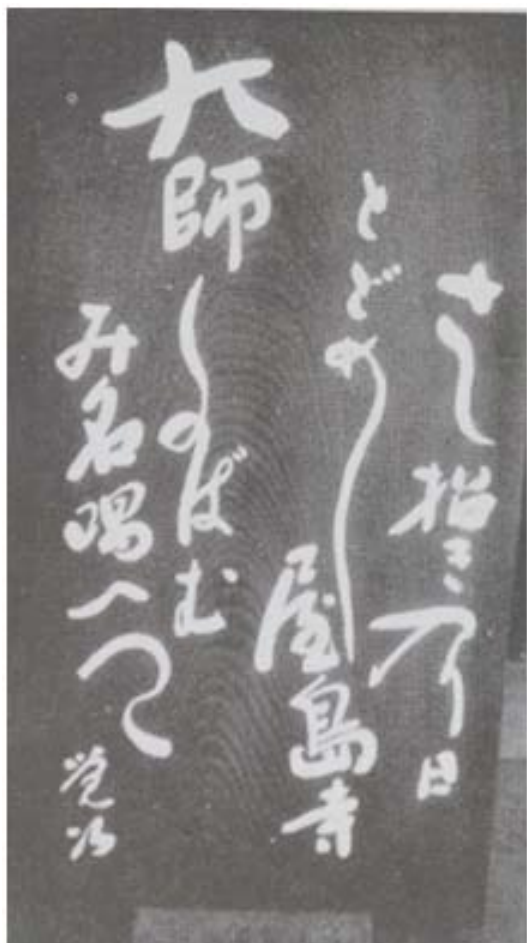
大師のみ前に・大師堂には年中お参
りの人々が世の苦楽を語りあつて
いる。



第八十四番 屋島寺

さし招き 入日とどめし 屋島寺 大師偈ばむ み名唱へつつ

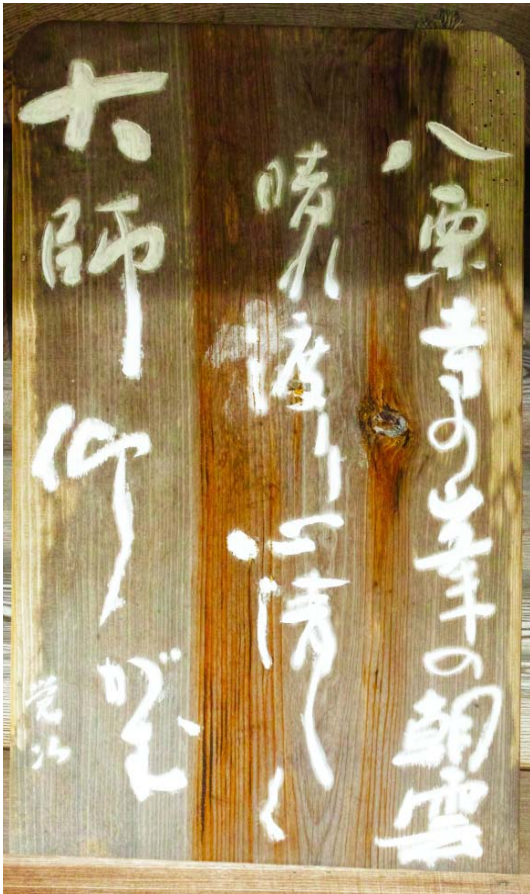
入日・大師屋島寺再建の折、棟上のできるまで、入日をとどめられたと伝える。



八十五番 八栗寺

八栗寺の峰の朝雲 晴れ渡り 心清しく 大師仰がお

清しく・すがしく。さっぱりした心
で大師をおがもう。



第八十六番 志度寺

玉藻よる 志度寺の庭に 南無大師遍照金剛 唱へ奉らむ

玉藻・たまも。藻の美称。志度の浦には、美しい藻がただよう。



第八十七番 長尾寺

夕蟬の 広前に 鳴く
長尾寺 み燈し 近く
大師 拝がむ

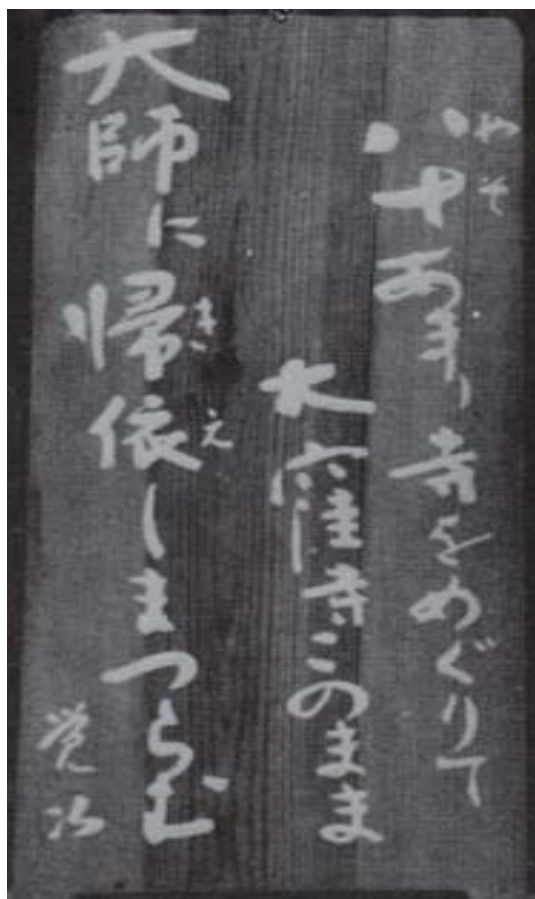
拝がむ・おろがむ。 おがむ。



第八十八番 大窪寺

八十あまり 寺をめぐりて 大窪寺 このまま大師に 帰依しま
つらむ

八十・やそ。八十あまりの寺。八十
八ヶ所の寺々。
帰依・きえ。仏を深く信仰してその
戒めに従う。



奉納について

扁額材料の樺桜は、橘製材所橘芳則氏。額の板削りは、八木茂氏。書は佐々木開庵先生の御協力によります。寺に運ぶためにも、大勢の方々の御世話になり、大師堂に掲げて下ったお寺さんにも、御迷惑をかけました。厚く感謝いたします。



著者

この携帯版について

額の写真のうち、カラー判は現在も札所において掲げられていた額を撮影したものの、白黒写真は右の奥付の「四国八十八ヶ所み仏の歌」から許可を得て抽出し、写真家の大西重雄氏によって再生した賜物です。

(携帯版編集者 令和三年六月九日 記す)

非売品
四国八十八ヶ所み仏の歌
昭和四十九年五月十一日 初版発行
著者 菫 淵 覚 次 (こもぶちかくじ)
送料 一一〇円
振替徳島二一八三七
印刷所 株式会社 東陽印刷
香川県木田郡三木町平木

落丁・乱丁本はお取替いたします。

